31
851

始

31-851

自序

天地は無字の大經卷にして、百千無量の妙義も混然として具備せざるはなし。故に山嶽を跋渉し江海を渡る、正に是れ好箇の時節なり。古人既に此の勝躅あり、況や祖師西來九年面壁、衲僧千古の榜樣を示すの地、一水一草一石一樹豈に凡庸ならんや。其他臨濟雪竇圓悟虚堂の諸祖、法幢を建て宗旨を立する處、岩雲奇峰其の勝概知るべきなり。予大正六年十二月神戸を發して上海に着し、翌七年一月杭の淨慈及靈隱に到

大正2年8月5日 外務省内交

り、二月天童育王に詣し、三月大江を溯り武漢に遊び、深く河南に入り、嵩山の巍々堂々玉寨の壁立萬仞、仰いで五乳峰頂大師の窟を禮するに及んで、其の高峻清爽の神韻、髣髴として警咳に接するが如し。髓皮骨肉の四高僧に圍繞せらるゝ威容德相、恍惚として慈光に包含せらるゝを覺ふ。若し夫れ立雪亭畔二祖斷臂の恨に到ては、腥氣人に逼り萬感潮の如く、覺えず涙痕の衲衣に滴つあり。隻履西に皈つて、少林春尚寒く、拜辭して鎭州に臨濟禪師の澄靈塔を禮し、四月北京天津を遊歷し、青島濟南を一見して、泰山に上り、曲阜に詣し、

南京を過ぎて滬上に皈る。五月更に雪竇山に明覺の塔を禮し、普陀山に惠鍔の蹟を吊ひ、六月姑蘇城外に虎丘禪師の道場を偲び、驢馬に鞭て楓橋を渡り、天平山に太湖を望見し、白雲下院を訪ひ、鎭江金山に佛印圓悟の芳蹤を仰ぎ、年來素志の一端を果す。其の間得る處又少からず。猶敎主牟尼の靈蹤を禮拜せんと欲するも、五天道遙に時光未だ到らず。

七月先師耕雲老漢病革なりと聞き、急遽布引山頭に歸り、慈顏を拜して行脚物語りを成すもの數日、先師微々として笑ふ先師今や無し。然りと雖も生前此の行を了せしは、予に於て

自慰する處なり。

大正八年正月

洛西嵯峨の閑房にて

關清拙識す

凡例

一　本書は予が支那行脚の日誌を抄錄し、此れに一部分の寫眞とスケッチを附して一冊とす

其の意盖し自已の追懷に備へ且つ二三知友の間に頒たんと欲するに過ぎず。筆致句讀元より體を成さず、甚だ慚愧に堪へざるものなり

一　地名人名等舊來禪門の讀癖あるもの現時支那音として聞きたるもの、振り假名を施せり。但し多少の錯誤なきを保せず、諸賢此を諒せよ

一　杭州行は上村觀光氏惠與の西湖誌を、天童普陀鎭江蘇州は

來馬琢堂師著蘇浙見學を、泰山曲阜は、澁川玄耳氏騰寫板の泰山と曲阜を、北京は北京案内を、少林寺は、雜誌禪宗の二條井蛙氏の、少林寺詣でを、何れも行脚の參考とせり

一　寫眞は上海三井物産の關進一郎、伊藤洋行の鮎川善哉兩氏の賜なり

併せて多大の恩惠を感謝す

著者誌す

目次

一 神戸より上海迄……一
一 達磨の屁でも嗅いで見る……一
二 船中……二
三 洋食……三
四 門司上陸……三
五 昔し噺……四
五 飲まず食はず……六
七 上海上陸……七
二 旅館から學校迄……九
一 禁酒破り……九
二 東本願寺……九
三 買物……一〇
四 茶目公と女中……一一
五 僧服注文……一三
六 入校……一四
六 就學……一五
八 靜安と城内……一六
九 寄留届……一八
十 故郷の便り……一九
十一 讀入藏紀行……一九
十一 院長根津……二〇

三　杭州行……二一

一　出發……二一
二　白粥の正月……二三
三　招賢寺と鳳林寺……二四
四　張勳の小便……二五
五　相國寺に土産……二五
六　靈隱寺……二六
七　淨慈寺問答……三一
八　杖を吳山に立てゝ……三四
九　智果寺問答……三六
十　入佛式……四〇
十一　西湖に告別……四一

四　學校生活……四二

一　一年生第二學期……四二
二　寫眞……四三
三　戴天仇……四四
四　他鄉知己に逢ふ……四五
五　煩悶……四六
六　白雲觀と海潮寺……四七
七　納豆と淺草……四九
八　入園拒絶……五〇
九　雪辱戰……五一

五　天童行……五二

一　蕃樂を聞きながら……五二
二　輕便インクライン……五三
三　天童途上の風景……五六
四　笊に搖られて……五七
五　天童山の一晝夜……五八
六　コイツが〳〵……六一
七　古天童……六三
八　育王寺と横濱の兩換屋……六四
九　威遠城寫眞器と砲臺の交換……六六
十　諦閑和尙の學德……六八
十一　七塔寺と自眞和尙の淨土……七〇

六　上海から漢口へ……七四

一　長江舟中……七四
二　武漢……八一
三　本願寺……八三
四　領事館……八四
五　赤壁に遊ばず……八四
六　伯牙臺……八五
七　歸元寺……八六
八　晴川閣と大別山……八八
九　黃鶴樓……八九

十　武昌城……九〇
十一　女を横に喜ぶ……九一

七　大治行……九二
一　全山皆鐵二千年の歴史……九二
二　日本の寶物……九四
三　花見の宴……九五
四　支那料理……九五

八　少林寺へ……九六
一　河南の平野……九六
二　兵隊の拾物と護照の光……九九
三　穴居の民族……九九
四　迎賓館……一〇一
五　食事……一〇一
六　馬牛車……一〇二
七　葬式……一〇三
八　洛水に失敗……一〇三
九　嵩嶺を越へて少林寺へ……一〇五
十　奇問……一〇六
十一　達磨は日本へ……一〇八
十二　達磨殿……一〇八
十三　影石……一一〇
十四　立雪亭……一一〇

十五　蚤の巣……一一三
十六　初祖庵……一一三
十七　達磨窟……一一三
十八　面壁の意味……一一四
十九　釋迦彌勒倒退三千……一一六
二十　瘤の羅漢柏……一一七
二十一　大根とウ井スキー……一二〇

九　洛陽へ……一二一
一　朝雲暮雨の感のみ……一二一
二　白馬寺と馬車の徽發……一二三
三　人間の荒れ馬……一二四
四　龍門……一二五
五　再び鄭州へ……一二七

十　臨濟禮塔……一二八
一　汽車賃二重拂ひ……一二八
二　澄靈塔……一三〇
三　屋根の上に首を出す大佛……一三一
四　讀書人と客棧……一三四

十一　北京入……一三六
一　燕京案内……一三六
二　地家の氏神……一三九

三　鐘樓……一四〇
四　雍和宮……一四一
五　北海と景山……一四四
六　紫禁城……一四六
七　天壇……一四八
八　古玩と姑姐……一五〇
九　萬壽山……一五〇
十　又來るか來ぬか分らぬ……一五四
十一　天津……一五五

十二　青島へ……一五八
一　櫻の榮る處……一五八
二　小學校……一五八
三　本郷大將……一五九
四　九水見物……一六〇
五　司令官の園遊會……一六一
六　本物の椋十饂飩の御馳走……一六二
七　三春の行樂……一六三

十三　泰山と曲阜……一六三
一　濟南公所長……一六三
二　檢察長梅光氏（地方裁判所長）一六四
三　趵突泉……一六六
四　武技十八般……一六六

五　道伴と汽車……一六九
六　泰山……一七〇
七　漢柏……一七二
八　廻馬嶺……一七三
九　南天門……一七五
十　無字碑前の撮影……一七七
十一　曲阜……一七八
十二　孔子廟……一八〇
十三　衍聖公……一八二
十四　聖林……一八三

十四　南京から再び杭州へ　一八六
一　南京……一八七
二　明の故宮……一八八
三　孝陵……一九〇
四　貢院……一九〇
五　秦淮の畫舫……一九二
六　麥畑と山……一九三
七　再び杭州へ……一九五

十五　雪竇山……一九五
一　孫蔣翁……一九五
二　啞の同行……一九六
三　足で櫓を蹴る……一九八

四　佛跡寺……一九九
五　サア大變……二〇〇
六　雪竇山……二〇二
七　禮塔……二〇二
八　寺誌拔萃並應夢名山記漢文二〇五
九　老婆親切……二一六
十　竹の船……二一六
十一　南京蟲と蚊……二一七

十六　普陀山參り……二一八

一　道伴れ……二一八
二　紫竹靈塲……二一九
三　普陀山と戒と念佛……二二〇
四　白雲包む普陀の山……二二一

十七　蘇州鎭江……二二二

一　蘇州……二二二
二　留園……二二四
三　姑蘇城外の寒山寺……二二五
四　虎邱……二二六
五　無梁殿……二二九
六　天平山より太湖を望む……二三〇
七　金山江天寺……二三二
八　焦山を望む……二三七
九　おサラバ上海よ……二三九

目次終

禪僧の支那行脚

達磨の足跡

關清拙著

一　神戸より上海迄

一　達磨の屁でも嗅いで見る

支那行脚は宗教視察でもなく、見學旅行でもない、宗祖達磨大師の塔處を禮拜するのが目的である。吳山越水時に祖師の芳蹤を尋ね、楚雲漢月或は英雄の跡を弔ふ、中々興味のある事ぢや、ツマリ千年前の達磨の屁でも嗅いで見るのである。

但し支那へは船で行く是は行脚で無くて、行船である、支那に着いて汽車に乗るなら、行車である、行船行車の旅に御錢が要る、達磨さんでも楊子江は御葦で渡る、御足の無いのは九年面壁以來の事ぢや、御錢を吳れるに遠慮は要らぬ吳れる丈は貰つて行く。

大正六年十二月四日嵯峨の住庵を立ち出で、神戸中山手なる耕月居士が宅に入り、兩三日は衣服藥物等を調へ、明る七日の朝飯は暫らく日本の飯の喰い納め、名殘の箸を置いて、午前十時出帆の熊野丸に便乘する。

二　船中

同船者は皆な支那人である。道人生憎と談すべき舌と聞くべき耳とを、何處かへ忘れて來た、是では今から少々心細い。

昔し玄沙和尚の曰く、患聾の者彼をして聞かしむるに聞き得ず、患啞の者彼をして說かしむるに說き得ず、患盲の者彼をして見せしむるに見得ずと、若し此の三者を濟渡せざれば佛法靈顯なしぢや、殘念ながら道人は三拍子揃つた患者である、ナント濟渡をして吳れまいか、イヤハヤ佛法靈顯なしで御座る。御山の阿羅漢通力を失ふた格である。

三　洋食

食事が始まる洋食の御吸物は皿に入れて出す、匙で吸う、次に煮〆が出る、三叉と庖丁を以て適宜に切つて喰う、試みに一刀下すと黑い燒き豆腐から、赤い血がヌート出る、兎ても羅漢の口には入りさうでない、ボーイの見せる献立は横文字である、道人の目には針金細工の標本を見るのと異りはない、漸く飯の上に福神漬を掛けた御皿にありつく、ヤレヤレと安神する。

四　門迄司陸

瀬戸内海は景色も好く浪も穏かなる筈を、天公なんの惡戯ぞ、雨を降らす、風を吹かす、船を動搖かす、是では睡眠三昧に入るより仕方がない。

翌日船は門司に着く、支那人計りの中に一人の日本人を見出す、大阪の菊谷と云ふ人であつた、兎も角一度上陸する事になる、神戸で喰い納めた筈の日本の飯を、モウ一度喰ひ納める、序に入浴もし散髪もした、午後二時半再び熊野丸の船客と成る、此地では七八人の邦人乘客があつて、談も盛で賑かになる。

五　昔し嘶し

王一善と申して廿五六歳の支那人が居る。京都の等持院村に住み、這回溫州に母を省すると申して、日語も少しは出來る、碁もチット計り打つ、二三回の手合せにツイ心安く談もする、此の男又佛敎信者であるだけ、普陀山の緣起を覺束なき日語でやる。

偖て御嘶は五代梁の貞明二年、日本の僧慧鍔は、北方五臺山より、觀音菩薩の靈像を得て、此を日本に持ち歸らうと、寧波から船に乘り、定海縣を過ぎて、或る島影に來ると、船はピッタリと止まつてしまうた、ソコで船頭が申すには御氣の毒だが御客樣、貴殿方の大切な品物を海に投り込んで下さい、此の船は龍神樣に見込まれましたと、手を合せて賴む、乘合も命には代へられぬから、其れ〴〵大切な寶物を海に投げ込む、船は依然動かぬ、慧鍔も今は致し方無く觀音の靈像を其の島の一角に上げると、船はスル〳〵と進み出した、法師思へらく、是れ必ず觀音大士此の地に止まり度の御思召と、遂に此の島に奉安した然るに張と云ふ男が居つて、寺を寄附し此を不肯去觀音院と名づけ、始めて靈塲が出來た、其の後は歷代の帝王人民は勿論、非常な尊信で、普濟寺法雨寺を始め、全島二百餘ケの寺と三千の僧が居る、今では夏期避暑客の爲に、上海か

ら特發の船もあり、甯波からは毎日便船がある、寺院は宿泊を許す、其れから洞や泉や岩に一々名があつて、全部を見るには三日もかゝり、德僧も學僧も居ると云ふのである、何にしても此靈場が日本の僧の手に依て開かれたと云ふので、頗る感興を催した。

六　飲まず食はず

愈々玄海灘となる、風強く浪高く、船の搖動は倍々烈しく、カリカリカリッと頗る氣味の好く無い音がする、頭がフラ〳〵する、胸がムカ〳〵する、遂々寢臺にモグリ込む、日が暮れ夜が明けて船は愈々進む、濟州島は雪白妙の景色ぞと夢に聞き、崇明島は早や見ゆると現に聞く、船は黃浦江に入るぞ、吳淞に着いたぞと云ふ。

三日二夜喰はず飲まずの羅漢も、キヨロリと目を開き、下ッ腹に力を入れ、フラつく足元蹈み〳〵甲板上へヌーと出る。

七　上海上陸

楊子江河口は幅三十二哩、濁流滔々として浪打つ樣實に凄し、支流の黃浦江でも、一萬二千噸の船が出入するとは驚く、兩岸の蘆葦蕭々として、霜枯の風に戰ぐ、海とも付かず河とは猶更思へぬ、日本で想像の付かぬ代物である、小さいソリ返つた民船が、ゴチャ〳〵と澤山見える、長堤曲浦溯江一時間計りにして、上海埠頭第七區に安着する。

稅關の檢査が了んで、三千の乘客一度に吐き出され、出迎への人、宿引、苦力等の群衆で埠頭一面は一しきり、煮えくり返る團子の樣な人間の頭である。

道人も約束有つて出迎へを當てに、ポカンと待つて居る、誰も其れらしい人は來ぬ、無人島に取り殘された罪人の樣な悲しさである。

勇氣を振るつて兎も角船橋を下りる、支那馬車に飛び乘つて、豐陽館を連呼する、三十分の後に漸く豐陽館に着いて蘇生の思ひをした。

言葉は通せぬ、案内は知らず、此の三十分間はイカーイ苦勞をした、併し此んな處で、二度も三度も、睾丸の安定が保てぬと有つては、達磨大師の御屁處かか、同文書院學生諸君の、スカシ屁一つ嗅されても、命に別條ないかと云ひたくなる。

古へ傳敎弘法の連中は、風を便りの小船に乘つて三十日五十日浪に搖られ、漸く明州奉化に着いて、一年か半年の修行で、ド偉い力を慥え、歸朝の後は入唐の沙門で御座ると、肩で風を切り威張つた仕事振り、何んと感服せずに居られまい。

二　旅館から學校まで

一　禁酒破り

豐陽館は上海の邦人經營中第一の旅館と聞く、食堂も寢臺も乃至便所も、熊野丸と同じ式である、道人は矢張り坐蒲團の上に胡坐をかいて、四角な御膳に箸と茶碗の御飯でないと、滿足の出來ぬ性分である、神戸から仁哉居士の紹介で湯淺洋行の森廣と申す人に値ふた、紹介狀の內容が何んで有つたか、自動車で月廼家の別莊に案内せられた、緞子の座布團に桐の手あぶり、四角の御膳が出る、淺い杯が出る、杉の割箸もある、其の上に當地滯在中の萬般、此の森廣が引き受けたと、大きく點頭れて感奮の餘り、遂に禁酒の紐を解いて仕舞つた。

二　東本願寺

明治十二年小栗栖香頂師の創設で、我が國佛敎家が海外に於ける最初の道場ぢ

やげな。只今の輪番、蕪木師は、世事萬般中々如才なく、穩厚で親切で信者の受も好いさうな、御顔は將棊の駒を倒さまにした樣な下細りのした、さうして眉毛を中心に髪の生へぎわと頤までとを等分した顔の持ち主である。

建物は西洋式本堂支那式庫裡、日曜學校に茶道生花、御說敎も無論ある、支那人は東洋廟と稱するのである。

其他に西本願寺や、日蓮眞言各一ケ寺宛ある、が信徒も勢力も遙に及ばぬと云ふ事である。

三　買物

上海の建築物は赤煉瓦造りの五階七階計りで、何れも是れも同じ樣で見分が付きかねる、東亞烟公司の看板を見覺えにブラリと出掛ける、曲り角では目標を記憶して歸りの便宜とする、路は狹いがアスファルト若くは煉瓦敷で實に好い道である、自動車と馬車と引つきり無しに通る、其の間を電車が（大衆可坐）といふ看板を揭げて走る、人車も多い、荷車も、一輪車も人間も實に夥しい事である、辻々には色の黑い印度巡査が、髭の中から目玉を出して、棒を持つて立つ、苦力は今にも飛び付き相な顔して右往左往する、膽玉の小さい人間は兎てもケロック處で御座らぬわい。

豐陽館前を北へ吳淞路に出で、篠崎病院に一寸敬意を表し、安齊洋行で蒲團一組を注文し、火鉢湯沸湯呑洗面器、凡そ日用一通りの品を取り揃へて宿に歸る。

四　茶目公と女中

宿の直く向ふの三階に亞米利加の茶目公が居る、路行く支那人の頭に水鐵砲でチユウと水を注ける、支那人は大粒の雨が降る位に思つて、一寸頭に手を上げ

る、茶目は飛び上つて喜ぶ、又通る又注ける手を上げる飛び上る、兒童の惡戯も是等は頗る罪の有る方である。

顧回る途端フト姿見に映る影、鼻の下に棕梠の毛のタワシの樣な髭が生いたち馬賊の子分宜敷の顏である、此が京都なら一寸問題だが不幸上海では何んでもない。

宿に生意氣な女中が居る、旦那は毎朝御香を焚いて御經を誦んで頗る厭世的だわとヌカス、なんだいお前は白粉を塗つて香水撒て、大の挑發的で且つ誘惑的だよといふてやる。

五　僧服注文

今日は宿のボーイを伴れて支那僧服の調達に出掛る、何處を尋ねても見つからぬ。貴州路の街頭に來ると、壽聖庵と云ふ寺を見つけた、早速飛び込んで、名刺を差し出し日本の僧侶である事を示し、其れから手帳の端に僧服を辨ぜんと要す請教と、書いたら、寺僧は點頭して、是も亦名刺を出す徵齊と有る、徵は筆を把つて漸等一等と答へた、ハテ困つた曉らぬといふ顏をすると、今度は暫停一刻と書く、ハヽア暫らく待てかなと、側邊の椅子に腰を卸し、西瓜の實を咬じり、茶を飲み莨を吹かして、時々顏を見合せては無言に笑つたりして、約三十分も過つと、成衣舖楊義の名刺を持つて、三十男が來て珍文漢の言葉と、手眞似足眞似種々にやる、道人一向分らぬ、其の內楊の奴道人の寸尺腰の圍り肩の行き　帶尺で量り、徵は楊と何にやら相談の上、帽子何角襪子何角計銀二十九元六角、代金は前拂と來た、上海弗で二十九弗六十　仙とは中々不廉な僧服である、楊は金を懷にして歸つて行く、何んだか不安な心もするが、徵は大丈夫と保證をするから、ボーイを促して歸途に着く。

壽聖庵は小さな寺であるが、僧侶は六十人も居る、現に本堂で三十六人、南無阿彌陀佛の合唱がある、御宗旨は聞かぬが多分淨土宗であらう、北京路は贓品を公賣する街で、日本人は泥棒町と呼ぶ處である、南京街は大馬路と稱して、商品取引所兼女郎屋の街、イヤモウ妙チクリンな處もあればあるもの、青物組合店に（管鮑同利陶朱事業）は頗る振るつた看板で御座る。

六　入　校

京都の金子彌平氏から、同文書院教授青木喬氏に宛てた添書がある、豫て賴んで置いたから、今日より入校を許すとの通知を受取り、直に滝家滙の同文書院へ急ぐ。

教頭の森氏、學監の大島氏に紹介され、受持教授濱田氏にも挨拶して、青木氏の住宅の一室を與へられ、當分茲に一老學生として住む事と成る。大島氏は陸軍少將、森氏は滿鐵の調査課長で第一革命當時の黒幕株、青木氏は日清日露の戰役に、いつも參謀部の文官で二十年來の支那通、以上揃ひも揃ふた豪傑連である、同文書院は根津一氏を院長として、三百の青年螢雪の功を積み、開校十七年秀才輩出して、今や支那都市の全部、書院出身の蟠居せざる處無きに到る支那に於ける我國の經營として　同文書院を第一とする、少くとも上海で同文書院を差引けば零かも知れぬ、而して院の特有は旅行にある、旅行を差引けば書院も零かも知れぬ、毎年八十の健兒、支那全土を蹂躙して、產物交通山嶽河川と、調査の屆かぬ處は無いのである、ソーして院長は生徒を見るに愛兒の如く、生徒の院長を見る慈父の如し、院長と學生學生と教授、其の親しみは、兎ても他校で見る事は出來まい。

七　就　學

四十にして顯はれざれば、其の人恐るゝに足らず、道人今年四十の坂を二つ三つは越した、一向顯はれさうに無い、マシて恐れられる筈は無い、道人たるもの安神して可なりぢや。

今年二十七歳の濱田教授は、此の四十幾歳の老生徒に一二三を敎へる、一ひ二う三いを敎へる、一個、兩、三、四阿、五阿、六阿、七個、八個、九、十、口を突き出して、舌で脣を推して、と中々骨の折れる事夥しい、然も發音は出來ぬのである、こんな事を何度も〳〵も繰り返さる、年不惑に到つて小學校の一年生に若返る、達磨大師の御屁の臭がソロ〳〵嫌に成りかけた。

八　靜安寺舊城內

三井物産の守谷氏は神戸高商の出身で、未だ一面識も無いが、兎も角達磨信者の一人である、同じ棉花部の關氏は宗演禪師に就て參禪をしたと言ふ、矢つ張達磨黨で此の兩氏から、電話の前觸れ、ヤガて馬車が廻され市內見物に出掛る。路順として先づ靜安寺を見る、山門は堅く閉して横の小門を潛る、禪宗で臨濟派である、住職は雪根和尙、生憎今日は不在であつた、法堂の（靈山不遠）の額の下で、五六人の僧は博奕をヤツて居る。此靈山不穩と書き換ねばならぬ、佛殿は（放大光明）の額が如何にも立派な書である、茲では大工が長持式棺桶を製作して居る、枯草離々として亂れ、塵埃積んで堆く、佛頭傾き、佛手壞れて、兎ても名藍とは思へぬ、其れから愚園に行つたが、此は實際愚であつた、支那式の荒れ果てた庭園に鶴が居るのと幾つかの廻廊と茶館がある、其れでも支那人は相當に入園するらしい。

再び馬車を駈せて城內を見る、湖心亭も繪葉書の方が遙に好い、街の狹いのと乞食の多いのと、異臭紛々たる事は、兎ても御話には成らぬ、此の邊一帶は易

者と本屋と古道具屋の店で、筒袖長煙管の連中女小供の見物人、實に肩摩轂擊の雜踏振り、成る程支那ならではと思はせる處も有る、一周して九階樓に上る樓はルナパーク式で劇あり落語あり活動寫眞茶店饂飩屋等盛んな者である、樓上から見下すと、法租共同兩租界より成立する上海新市街も、一望の下に見える黄浦江の蜿々たる濁流も見える、其の西南茫々たる平野は實に涯際無く、其の大なるは驚かざらんと欲するも得ずである。

九　寄留届

上海領事館は江岸に沿ふた尤も好い位置に有る、總領事有吉明氏は敏腕の閉こえより、寧ろソーで無い噂を多く聞いた、其れは兎も角道人も寄留届と敬意を拂ふ事だけは怠つてはならぬ、青木氏と同行訪問したが、領事は嚴父三七氏の不幸で出勤無く原田副領事の溫顏に接し先づ寄留届も無事に濟んだ。

十　故郷の便り

上海に來てから二週間に成る、未だ故郷の便りは無い、餘りに短調な生活で今日はツク〳〵異郷天涯の孤客と云ふ樣な事を感じた、郊外に散策して見ても只寒むい計りで、茫々たる平野耳目を慰む何物も無い、讀書も飽き萇も嫌に成つた、此んな時に手紙でも來ればと思ふ處へ、松村耕鐵から、淋しく候〳〵と大きな字で、風土病に御注意と小さい字で、此れ丈の文句であるが、思友の情綿々として盡きぬ、仁哉居士からは、蓄髭痛快と云ふを始めに、自家の活計得意に非ず失意に非ずと伸べて臘八接心に結びを付け、諄々と說きたる處、如何にも居士に面晤の感がある、居士牛眼からは來年三月潯陽江頭で御目に掛かるとある、其の他種々な手紙を見て非常に嬉しかつた。

十一　讀入藏紀行

本願寺の僧、能海寛は入藏の目的で、明治三十四年京都に妻子を殘し、上海から長江を重慶に溯り、成都に入り峨眉山に登り、大雪山を越へて（打箭爐）迄行きながら、追ひ返され（巴屯）から金沙江に出たが渡る事が出來ぬ、泣きの涙で重慶に歸へり、再び四川から陝西に入り、劒閣七十二峰や蜀の棧道を過ぎて長安に達し玄奘三藏の舍利を拾ひ、渭水を渡り咸陽に入り、秦の阿房宮の跡を弔ひ周の文王武王の陵を拜し、甘肅から青海迄來ると、猛犬に足を咬まれて發熱し、病中賊の爲に路用の金を奪はれ、又も重慶に引き返し、雄心勃々三度目は、貴州より雲南に入り、大理府（古への妙香國）を經て迦葉尊者入定の地雞足山に參拜し、長程三萬二千里、土人苗族の爲に首を取られた、通信の言々が血であり涙である、道人も其の辛苦其の最後に同情の涙が止め度無く流れた。

十二　院長根津

院長は三百の愛兒と共に、正月の餅を喰ふべく酒を飲むべく、萬歲を唱ふべく毎年東京から十二月末に態々此の上海に來る、齡七十になんなんとして白髮長髯、ヨボ〳〵として御座る。

曾ては洪川、滴水の二禪師に師事し、龍淵峩山の二老にも鉗槌を受けし豪のもの、故近衞篤麿公の知遇を蒙り、日清役には大功を樹てた人である、氏が京都東山東方書院在昔の物語り、道人も荒らしに行きし一人であつた事抔白狀して失敬する。

三　杭州へ

一　出發

十二月三十日校門に七五三繩も張られ、門松も立てられ餅も運ばれ、三三五五正

月氣分の學生を見受ける、道人はズット四十年程若返つて、此の上又一年も後戻りをすると、生れぬ先の親父の代に立ち歸る、今年は掛け取の來ぬ代り、此の儘で年を迎へずに置く、ソコデ濱田さんを誘ひ出し、滝家瀧の停車場に行くと、火車は出た後、龍華驛迄歩いて、次の汽車を待つと、九時三十分に乘れたlulu魚の鱠で有名な松江を右手に見て、嘉興硤石大驛小驛を通過し、三時半には杭州に着いた、直ちに寶石山下の帝國領事館瀨上恕治氏に敬意を表し新新旅館と申す支那宿の御客と成る、杭州は節季でも何でもない。

旅なれば蕎麥も喰ずに年のくれ

二　白粥の正月

明れば大正七年一月一日牛眼居士から贈られし旭日章を、ステツキに括り付け旅館の窓に掲揚し白粥三杯哀れに目出度萬歳を三唱した。

屠蘇のまず雑煮もくはず支那住ひ

春を迎へず春は來にけり

如何に物好きとは申せ、正月は正月ぢや、然も白粥の正月ぢや、天涯の孤客に一片の同情は無いかい、新年の詩ぢや、

遠在二異郷一拜二帝宸一　新新館裡値二年ノ新一

誰知白粥三杯ノ容　迎祝西湖第一ノ春

とやつた何と如何で御座る。

西湖の景色は實に好い斷橋の殘雪、平湖の寒月、是は寒い詩で、雷峰の夕照、柳浪の聞鶯、は暖かな句ぢやな、花港の觀魚、蘇堤の春曉、ノンビリして居るなあ、曲院の風荷、三潭の印月、涼しそうであるぢやないか、孤山の遠望に、南屏の晩鍾淋しい響だのう。

三　招賢寺と鳳林寺

湖邊の招賢寺を訪ねる、住僧如幻和尚大いに歡迎して吳れる、本尊は西藏製、白玉の釋迦佛（等身大）故端芳の寄附ぢや、道人は先づ高聲に大般若理趣分經を讀んで、國運增隆を祈り、次に傳燈の祖師を禮拜した、如幻大喜びで茶を持つて來る菓子を出す、今度新築の地藏殿も案内する、來る三日落成式入佛供養の請待迄して吳れた

それから鳳林寺に行く、寺は烏窠道林の開創で、唐の白居易が佛法の大意を問ふたら、諸惡莫作、衆善奉行と答へた、白居易はソンナ事位なら、三尺の童子でも知つとる、ト云ふと和尚スカサズ三尺の童子も知つて居るが八十の爺も行ふ事は六ケ敷ぢや、と云はれて白先生大にヘコンだ事がある、一寸懷かしい寺ぢやて、

四　張勳の小便

宋の忠臣岳飛の廟に參ると、墓の前に讒臣秦檜夫婦の石像がある、參拜の諸君が必ず小便ヒリ掛けるのぢや、是は正に迷信であるが、然し面白い、秦檜に小便ヒリ掛けた程の者は、必ず忠臣に成るぢやげな、清末に張勳以外玆で小便たれた奴は無かつたと見へる、張勳も小便をヒリ掛けて止め居つたわい、臭い事〳〵、石摺を澤山賣つて居るが買はないよ、

五　相國寺に土産

清漣寺は五色の魚で名を取る、魚樂國と書いた、額の有る建物の前が、長方形の池で五尺位の鯉が、無數に游で居る、池の眞中に小さい古雅な塔が有る、相國寺の獨山和尚に土産にしたいがソウもなるまい、鎌倉の建長寺に一年間留學して居つたと云ふ、若い坊さんに逢ふたが、日語はサッパリ出來ぬ、道人が

日本に歸つたら先づ此の馬鹿坊主の格ぢやなと感ずる、

本堂の横手に細い溝がある、ドンと四胡蹈むと、水がボロ〳〵と湧き出る、此は龍神が怒つて鼻息を荒くすると申す事ぢや、不思儀に、蹈めば出る蹈ねば出ぬ鼻息ぢや、大方日光の手を叩けば啼く天井の啼き龍の兄弟分であらう、

六　靈隱寺

廬同の詩に

問レ山緣レ底名二靈隱一　山曰當年隱二許由一
千古冷泉流不レ盡　客來洗レ耳莫レ驚レ鷗

清漣寺を出て谷川を沿ふて行くと、竹籔がある、烏渡嵯峨の渡月橋の先の、山田村に行く樣な心持ぢや、暫らくすると高い石橋を渡る、其處に百姓家が十五六軒ある、茲が總門で總門を拔けて冷泉橋を渡る、此の流れが許由の耳を洗つた水ぢや、左手に岩がある岩に、釋迦布袋觀音不動藥師と、御ナジミの佛樣が澤山彫刻してある古寂て苔が着いて何とも云へぬ味がある、モ一つ左に折れると洞窟ぢや、窟の中にも十六羅漢其の他種々な像がある、窟の佛は刻も新しく手際も拙い、ドーセズツト後に出來たものぢや、窟は一度入つて廿間計り行き、右に折れて又三十間も有ろう、見事な洞窟である、窟を出て少し岩に攀じ上ると、又小窟がある、茲にも佛像が岩面に澤山刻み付けてある。其の窟の天井に光線の少し漏れる處がある、一綫天と云ふぢや、其れから窟の出口や外面に詩や文章が澤山彫込んである。

來て見れば故郷の秋や飛來峰

と御國物か一句丈ある、ナンでも前の領事の句とか云ふ事ぢや。

實際山の中に清らかな小川が流れて、寺や堵が見へて、ツイ日本が戀しく成る

其れから岩の下を水が潜つて、岩面に小穴が出來て居る、口を着けて吹くと法螺貝の樣に鳴る。

序に飛來峰を說明すると、天竺の僧、惠理が始めて此に庵を結び御經の飜譯をした時、此は天竺の靈鷲の嶺、何時飛んで來たかと云ふて、飛來峰と名付たそうな、

八角九層の古塔は全面佛像の浮き彫り、無論石である、亭々と云ふ四阿は橋上の亭で、愈々靈隱山雲林寺である、山門には雲林寺の額が掛かり、內には布袋が大きな腹をツキ出して笑つて居る。

佛殿の間口十八間奧行十間の三重屋根、本尊は釋迦三體天井無しの見透しぢや豪勢なもんぢや、其の左手が五百羅漢堂、木像の羅漢君一々名刺を出して見せて居る、が道人は覺へて來なんだ、右手は禪堂齊堂方丈客室厨房ぢや、

偖て此で名刺を出して濱田さんの通譯で、住職に御目に懸かり度いと賴んで見ると、大和尙は湖邊の別莊に御座るが監寺なら居ると云ふので、監寺の卓梵和尙に値ふた、濱田さんと頻に話す、其の中道人に向つて、中國語不會呀、と來た、無論不會ぢや、英國語、と來る是も不會ぢや、此奴中々ハイカラで御座る、然らば筆談、と云ふ、道人も是是とやつた、スルト、卓梵　寒山輟翠流泉無聲　無物三供養遠來高僧愧々甘い事を書くさる、道人も古澗寒泉正好供狼　龕洞古佛解點頭　とやつたら、深謝慈悲と書き居る、是では筆談も危い事ぢや。

其の中御夕飯の御馳走が出た、湯葉や豆腐や野菜で、七種計りの汁や煮〆や丼であつた、御飯は玄米のボロ〳〵ぢや、御飯が了んで御茶に成る。

紀念に何か書けと言ふ、考へても靈隱寺に來た卽興浮かばん、エー儘よ胡摩か

せとグル〳〵と達磨を書いた、スルト卓梵直ちに筆を取りて。

能書能畫皆通禪　一笑相逢大有緣
昔日達磨航海去　今朝何意尙依然
恭祝龍華大和尙畫達磨之相俾留存
永爲紀念　　納弟卓梵

是は恐れ入つた、暫らくして卓梵は、自ら胸を叩き達磨と云ひ、又道人を指して磨達と云ふて、呵々と笑ひくさる、癪にさわるが何とも返す言葉を知らぬ、此う云ふ時に通譯で馬鹿―と云ふて呉れとも行かず、難儀な者ぢやて、由來通譯と申すものは、暑い寒むいの挨拶や住職の名を聞く位で、話が込み入つて來ると、てんで間しやくに合はんものである。

ボロの出ぬ中御免を蒙る。

下天竺寺に御參りをしたが、建築は大抵同じ事ぢや、中天竺上天竺はモー失敬する虛堂和尙の鷲峰塔を參拜したいが、殘念ながら、知れなんだ。

七　淨慈寺問答

道人が是非行き度と思つて居たのは、此の淨慈寺である、東海日多の豫言をなされた虛堂老祖の道場である、杭城の湧金門を出でて右手に赤色の雷峰塔を見て、左側が永明延壽禪師の宗鏡堂ぢや、序でながら參拜を致す。

黑石の四角な塔が有る、銘を讀みかけると、夫禪門者西方稱念爲初門モー讀まないよ、由來道人は念佛が嫌ひである、永明禪師は法眼和尙の第三世、天台華嚴法相、三宗の旨を明め、薪の壞れたのを見て悟つた和尙ぢや、撲落非他物と叫んだり、欲知永明旨門前一湖水　風來波浪起　日照光明生　とも云ふて居る、宗鏡錄百卷を著した和尙ぢや、

念佛の合唱を勸める男とは思へぬ。

孤猿叫落中岩月　野客吟殘半夜燈
此景此時誰得意　白雲深處坐禪僧

と和尚自身て證明をして居る、兎も角大慈山永明院は是である、今は小さい寺で堂守の乞食坊主は何も知らぬ。

此から半丁あるか無しで、大きな門に（震旦靈山）と額が掛かり、正面が勅建淨慈寺ぢや、布袋に四天王ナカ〳〵大きい、向つて右に齋堂祖堂が有る、佛殿は現在建築中で、已前より稍縮少するらしい、靈隱に比べて粗末で小さい、其處此處に徑三尺位の礎石や、金屬の大香爐を見れば、昔歷々の伽藍で、今はキレキレの御寺と合點もゆく、長廊や階段の工合では、或は燒けたかも知れん、濱田さんを煩はして、和尚に逢つて見樣と種々手を盡すが駄目ぢや、第一座の和尚が應接に出た、ソコで當山の和尚は何と言ふ名で何んな風な人かと問ふて見ると、空禪と云ふ名で性質は平和で世と共に浮沈すると答へた、七十餘りの老僧で念佛が日課と又つけ加へた、ハヽア此の地では禪宗の臨濟然も楊岐の眞孫と聞き及ぶ、其れが坐禪をせいで念佛とはケシカラヌと云ふてやると中國の宗敎界は頗る混亂したもので、有力の人が出て維持せぬと駄目であると答へた、ソコでモ一つ突込で、當山空禪和尚、靈隱の心融和尚は、有力の大人で御座ろうチト奮發して己墜の宗風を扶起されてはどうぢと云ふと、イヤ空禪は小人心融は法中の賊、自救亦不丁、唐宋の時は禪律並ひ行はれ淸に到つても典行尙存す民國成立以來守舊の者は麟鳳の如く未だ出でず、百不知の漢、本敎を屛棄して所謂佛に賴り生を逃る滔々皆然り、況んや國事紛々自ら愼まざれば、禍將に至らんとす、有力の人と雖も自ら守るのみ、豈慨然たらざらんやと、ポロ〳〵涙

を溢して御座る、ヤレ〳〵尤もの次第ぢや、名刺を所望したら、釋身橋、横に蜀川峩眉雪庵、と記してある、虚堂和尚の事蹟を尋ねて見たが、彼は知らぬと言ふ、常山は初め法眼宗で、宋の時に成つた、虚堂は當寺には無いと云ふ、道人は虚堂錄に淨慈の語あるを示し、四明の人で徑山育王其の他十刹に歴住した事も付け加へた、スルト身橋暫らく考へて、寺史を持ち出し、有る有ると指して見せたが、只世代で有る計りで、何の事も分らなんだ、ソコで道人は日本の禪は虚堂の眞傳計りである、是非禮塔したく思ふと語つたら、大に喜んで日本和尚の墓があると云ひ案内して呉れた、豈知らんや天童の元如淨の墓であつた斯くて虚堂和尚の事蹟も知れず、靈隱寺の鷲峰塔も禮する事は出來なんだ。

八　杖を吳山の一峰に立て

同じ路を引き返して吳山に上る、到江吳地盡隔岸越山多と云ふ句を思ひ出す、錢塘江を隔てゝ吳越の分れである、立三馬吳山第一峰とは元の太祖が得意の句と聞く、道人は杖を吳山に立て、先づ前面の錢塘を望み、浙江の潮は此いつかなと頷き、回顧て杭城及び西湖を眺める。

南宋の首府であつた頃は、臨南府ぢや、唐末には吳越王錢鏐の都である、城壁の周廻三十五里、湧金、清華、艮山、武林、等の十個の門が有る、人口も三十萬なら中々の繁華、何分西湖と云ふものを控へて居るから、甘いものぢや。

孤山を中の島に白堤と蘇堤、蘇堤に六橋が掛かり白堤に斷橋が有る、寶石山に保俶塔、葛嶺や烟霞嶺が連り、三潭印月、湖心亭、正に一幅の南畫である、中禪寺や諏訪湖より、ズント小さいが、高松や岡山公園の比では無い、水は極めて淺いが清らかである、此の位で山を下りる、湖水の氷も今日は解けて居る、舟に乘つて林和靖の墓を弔ひ、放鶴亭を一見し、更に舟でグルリと廻つて、圖

書館前から孤山の頂に上る、前方は外湖、白堤の方は裏湖、南は南湖、三潭印月が湖中の池、九曲の石橋に二三の亭も有る、又別趣の風景ぢや、湖水廻りは此れで了る。

九　智果寺問答

フト途で逢つて出合がしらに、御夕食を差上るから來て呉れと云ふた和尚は、葛嶺の中腹智果寺の聖裔であつた、コイツ面白いと早速に承知、案内されたのは、本堂を通り越して客堂の二階、見晴らしの好い座敷である、茶菓と一通りの挨拶が有つて、前住聖華和尚に紹介される、五十餘りの品の好い人ぢや、名刺を拜見すると、天台教觀宗派と肩書がある、ハテ變だと先づ御宗旨を問ふて見る、臨濟宗ぢやと申す、其れなら御尋ねをする、禪宗は坐禪が第一、坐禪の餘暇の教相か、教相專門の禪僧か承り度い、ハイ〳〵入門は一にあらず、人に利鈍がある、只佛言に依り心意を明め度い計りぢや、御愧かしい事ぢやと云ふてスツ込んだ、ドーモ天台か禪か分らぬワイ、次は西天目禪源寺の能和和尚現代民國の三高僧と云ふ評判の人ぢや、浙江省では首刹であり首席であるそうな挨拶が了で、恭しく問ふて見る、老和尚は臨濟の何世で御座る、能和は長い白髭を捻つて、傳燈四十三代である、楊岐派に屬して、密雲、天隱、玉林、其れから能ぢやと悠々として居る、和尚尋常何を以て人を濟度して居られる、直ちに第一義諦を示す、ホホウ作麼生か是第一義諦、と問ふたら、ドーした事かスツカラカンに怒つて卓を打つてブツ〳〵云つて引込んだ、道人トホウに暮れて居ると、一老僧德化と云ふが出て來て、適來の公案、未だ圓ならず、德願はくば一轉語を代らん、第一義と云ふも早く第二頭に落つ、と書して昂然として去る。

次は聖華が來て、強て○と名く、と書いて、今度は聖裔、我初學の知る處にあらずと雖も、濟宗元口を開く處なし、是を以て三世の諸佛一半を得ず、歴代の祖師八千を缺く、上座又一語を要す、と長たらしい文句である、道人も筆を取つて滿目の江山正に好し供養するに、此でドーやら收まつたらしい、無相の眞慈と挨拶して、ヤツと御夕飯にありついた、未だ箸を下さぬ前に、能和手に茶椀を提起して目をむいて、是れ第一義と云ふて力む、ソコで道人は、何ぞ適來持ち出ざる、とやつたら、又プン〳〵怒つて、出て行く、此りやイカン老僧を怒らして詮無い事と、聖裔を通じて、外國の學人華禮を知らず、却つて和尚に觸忤す請恕せよと、妥協を申し込み、漸く食事を共にした、玆迄は好かつたが、老僧自分の箸をねぶつて、油揚や竹の子の煮〆を、道人の飯の上に無暗に、ノセて吳れる、ソウして請請と云ひくさる、聖華も聖裔も、負けず、蕎麵や湯葉を、自分の箸で、道人の茶椀へ入れる、濱田さんに困つたなーと云ふと、濱田さんはイヤ是は最善の禮儀で、賓客を待遇する意味ぢやと云ふ、禮儀でも最善でも、此計りは閉口、老僧を怒らせた儘で、妥協せずに置けば好かつた、食事が終ると、聖裔が、昨日招賢寺から、上座の來杭を報せて來た、御訪する處を、光臨を願ひ、粗飯怠慢、と挨拶があつた、其れから御互に同宗で兄弟の樣なもの、胸襟を開て語つて吳れた、日本留學の事、費用や食事の事、戒律の事等を問ひ、大惠禪師の墓は育王に有る事、徑山は餘杭の西で、西湖から百廿里あると云ふ事、支那の禪宗は現時、念佛行者計りで、坐禪もせず、戒律も持たぬと云ふ事、形式丈でも金山江天寺と西天目と天童とは坐禪をすると云ふ事、全體が腐敗して佛法は無いと云ふ事、種々な內幕や話して吳れた、

相逢一笑好因緣　智果開來法味全

深夜挑燈尚遇客　不知身在異郷天

當夜は卽興を書いて御暇すると、種々引止めて戀々の情緒が見える、支那僧もコーして見ると、他人で無い氣もする、遂に挑燈をともして、道人を宿迄送つて吳れた。

十　入佛式

聖裔は翌朝禮に來て、ソーして如幻と身橋の人物評を求めた、如幻は德僧身橋は才子と云つてやつたら、二老一口に道破せらる欽佩々々と云ふ、其れから身橋は蜀人好んで阿片を喫す故に齒涅しと云つて居つた。

今日は約束であるから地藏殿に落成入佛式に行く、遠近の大和尚小和尚、取りまぜ合せて一百、モー式は始まつて居る、木魚と磬を打いて、阿彌陀佛〳〵と新築の地藏殿の中を、グル〳〵繞つて居る、約一時間もすると、坐り込んで、グラリ〳〵と眠をする、三十分程も經つと、ビックリ目を開いて磬をガンとやつて阿彌陀佛〳〵と、ド鳴つては、又坐つては眠る、道人も阿彌陀佛の合唱をしてぐる〳〵廻りをヤツて、坐つて見るが、椅子の上に丸い坐蒲團であるから落ちそーで眠れん、コーした事が、朝の五時から、晩の六時迄一週間も續けると云ふ、タマラヌ譯ぢや、不思議に信者らしい者一人も居らぬ、十時頃に成ると雜煮餅の點心(茶ノ子)がある、此の茶の子の間に常州天寧寺治開大和尚に値うた、申す迄も無く當日の大導師である、如何にも道德高き風貌である、種々聞きたい事はあるが、時間が無いので殘念ながら、挨拶丈で御別れぢや、如幻老僧の望みで觀音や達磨を五六枚繪いて、正午の御馳走は辭退して、杭城站なる停車場へ。

十一　西湖に告別

拱震橋は外交失敗の居留地、道人に用事は無し、禪から淨土に宿替への祿宏禪師の雲棲寺は遠く雲居の羅漢で自慢の聖水寺、百丈大智の息子、寰中の虎跑寺、湧泉、聖果、舊蹟であるが行く程の事も見る程の事も無い、六和塔は時間の都合が悪い、おサラバ西湖よ杭州よ御緣があつたらモ一度來る。

四　學校生活

一　一年生第二學期

碁を打つたり、撞球を敎はつたりする中に、正月の休みも終へて、學期始めと成る、老學生今日から愈々敎場に出て、支那人の敎授を受ける、朱先生は淸徹なる聲で、中村、靑木、山口、石田、とやる其の度に學生は、到、と答へる、道人頻と敎科書を繰り返すが其れらしい文字が見付からぬ、三角な目玉を丸うして、先生の顏を見る、其の中本文に取り掛かる、安神して三度程は發音の口眞似をやる、次は眞島先生が、流暢な辯で和譯を付ける、今日は新年の挨拶の言葉、官吏學生商人主從の區別で、身振と言葉の可笑味を拜見に及んだ、此の如くにして支那語は敎へられる、毎日敎科書以外に、野田、石井、と云ふ樣な發音がある、コーした經驗の無い道人には、此れが一つの疑問であつたが、人名點呼と聞かされて、ナーンの事ぢやい、一寸發音を、從前がツオンチエン、想像がシヤンシヤン、今日の御午飯が、今天响午、丸切り三味線の音で御座る、

二　寫　眞

道人の支那僧服姿の寫眞が出來た戯に題して

祖道東漸開二一華一　九年不レ用坐三岩阿一

長蘆江上渡舟路　漫畜紫髯一學二達磨一

宋の范至能の吳船記に、長蘆の江岸に一葦堂あり、祖師を祭るとあつた、長蘆は今の楊州の一部であるそうな、達磨は南京の北極閣で武帝と對談して後、窃に長蘆に渡つて、滁州の方へ出て黃河の南岸に沿ふて、河南に入つたと見える

三　戴天仇

と名を聞いて雲衝く計りの大入道、と計り思つて居たら、今日圖らずも見て驚いた、小體な色男である、支那時局問題に就て、日本人の日本語よりも、ズンと甘い江戸辯で二時間に渡る演說、日本の風俗人情俗諺を例證に、支那を說き明治維新前後德川末を引合に、支那人物を批評し、支那人の殘忍性を說き、最後に支那人が、堯舜を謳歌するは共和思想で、孔子も孟子も贊成する理想の政治が共和ぢやと結び、要するに支那の將來は、成る樣にシキア成らぬ、人間の考へ通りにはイカヌと甘い處を聞かした、三百の學生皆醉はされて仕舞ふた、今年廿八歲で、政治新聞に筆は取るが、政黨とは關係が無いと云ふて居つた。

四　他鄕知己に遇ふ

鮎川風來居士が來た、フラ〳〵と來て、フラ〳〵と歸るから、風來居士ぢやと本人の自稱で有る、居士は去年十一月、フラ〳〵と上海に來て、又フラ〳〵と廣東臺灣を廻り、今日フラ〳〵と上海に舞ひ戻る。大阪からの通信で、道人の來て居ることを知り、旅裝も解かずに、フラ〳〵と訪て來た譯である、其れから道人を誘ひ出して、自動車でフラ〳〵と六三亭に行き、痛飲大氣焰を吐いて歸りに臺灣蜜柑一筐と道人とを馬車に積み込んで學校へ送り屆けて、二日目に又フラ〳〵と來た。道人の部室は三疊敷で、蒲團と机と火鉢で一杯に成つて居る、其の中で割子の辨當を折半して、一枚の蒲團を引張りあいして、兎も角も

朝まで寢た。

五　煩　悶

コンナフラ〳〵とした男にも一大煩悶がある、居士の悟つた處に依ると、天地宇宙森羅萬像盡く、一眞如の流れに過ぎぬ、言ひ換へるなら一大我である個人個人は小我である、小我は大我の分業であるとも云へ樣、此う云ふ根底を置いて、奮鬪努力する事の眞理であるを疑はぬ、然るに事實は其の小我が、吾人に享樂を要求する、酒を要求する、一切萬事先人の戒めた處を、盡く要求して止まない、小我の要求する儘にヤルとすれば、學問と修養を廢さねばならぬ、修養と學問は、何時も小我の要求を拒絶する、ソコデ二重性格に育て上げられ頗る迷惑をする、今スコーシ小我を安心させて、究屈でない程度にする事を、宗教界と教育界に切望する。

ソウカ、では君の爲に享樂院小我要求安心居士と、法名を付けてやらう、序に二重性格も、石塔の裏に刻つて置け。

六　白雲觀と海潮寺

白雲觀は道教の本山である、北京や南京の本山も同格であるげな、青木濱田兩先生と行く一風異つたヒヨロ高い門を通つて、本堂に參詣する、是は老子莊子の神仙教に、佛教の儀式を加味した、變態宗教である、宗教と云へるかドウか分らぬ、兎に角宗教と云つて置く、阿彌陀さんや、觀音さんを祭り、觀音經も阿彌陀經も讀む、吉凶を占ひ、禍福を祈る、住職閻雪鈞は不在で、湯竹庵と云ふ八十九歲の道士に說法を聞いた、老子を教祖として開教二萬年であるげな、青木さんが、老子からは三千年ぢやとヤリ返すと、湯は黃帝に訂正する、黃帝は四千年ぢやと云ふと今度は玉帝迄と繰り上る、ドーしても二萬年の推し賣りをする。

失敬して上海南門の海潮寺を訪ねる、現に三百の雲水が留錫して、中々の大伽藍、第一布袋殿中央に觀音さんと布袋さんの脊合せ、第二阿彌陀殿、第三客殿、第四禪堂、禪堂は止靜の版が掛かる、臨濟宗か曹洞宗か尋ねて見る、五六人の僧が集まつて、禪門要點を繰り返して相談の上臨濟も曹洞も禪宗であるとヌカス青木氏も濱田氏も其の馬鹿らしさに呆れる諸禪德這裡に在りて、其麽邊の事を作すと問ふたら、明心見性佛祖不遠と答へる、中々エライ事を曰ふ、作麽生か是れ佛と問へば阿彌陀佛阿彌陀佛ぢやとさ、瞎漢話頭亦不知○禪堂を見に行く、中央に聖僧を祭り、四方單で單の後面に、竹を釣るし、袈裟をヒツ掛け、草履を脱いで、單の上に坐る處、日本と異りは無い、單の後に黑幕を卸して、寢室にした處、帽子を冠つた儘坐るあたり、一寸、變つた處ぢや、其の他本堂も佛殿も二階造りで、二階は寢室に成つて下から見ると、五六人の僧がコロコンで居る、先づ二階は安下宿の格である、此の三百五百の雲水は、必ずしも有德の老師を尋ねて集るとは極まらぬ、只三百養へる寺に三百集まり、五百養へる寺には五百來て、修行するでも無く、學問するでも無く、一定の法規も無く、剃頭の穀つぶしに過ぎぬのである。

城外の龍華寺は、三國時代の建築物で有名なもの、今は兵營と成つて遊覽者の出入を禁じて居る。

七　納豆に淺草

小宮小四郎君から、濱納豆と東京苔を、ソレから病中に拘らず、自分で小包にして、局迄出しに行つたと云ふ、手紙とが届いた、非常に有り難く感じた、道人は由來人に物を贈つた事が無い、コンナ嬉しさの有る物なら、將來心掛けてチト贈る事とする、他人に迷惑を掛けて置いて、不足を云ふては濟まぬが、學

校の三度三度の食事が、いつも豚の脂肉と鹽物の燒き魚ぢや、汁にも香の物にも鰹を掛けてあるドーモ胸がムカムカする、入校以來福神漬を買つて、朝も晝も晩も福神漬で御飯を推込む、納豆に淺草、今日は百味の飲食、一粒一粒味つて頂く。

八　人園拒絶

支那服は綿入のパッチ、綿入の襦袢、綿入の上着、中々暖かく、歩き好く坐り好いから、道人近頃支那服である、今日は節分で、森廣氏から電話である、鮎川も落ち合つて、同じく上海新公園に行く、門を入る事二十間、印度巡査が道人をツマミ出す、犬と支那人は入園拒絶ぢや告示を見ろ、とどなる、森廣鮎川兩氏が、日本人である事を、辨明するが、支那の服を着て支那の靴をはく、支那人では犬と同じ資格である、人間並に入園は出來ぬと云ふ、致し方なし、實際支那人は電車でも汽車でも汽船でも、犬と同じ代價で同じ取扱ひと聞き、頗る支那服の悲哀を感じ、モー支那服は着ぬぞ。

九　雪辱戰

神戸で八圓の編み上げ靴は、綿入の裾をヒツ掛け二度も三度も綻ばかした、鮎川に不用の脊廣がある、始めて着て見る、中々面倒臭いものである、首玉を嵌めた處は、鮎川の二重性格よりも、モツト究屈である、用意が出來た、田舍り小學校に勤める安物の教員に見えると云ふ、其れでも犬より結構、再び新公園へ出掛ける、兩手を拔ける程振つて、ジダンダ蹈んで、此でもか――と大いに雪辱戰の意思を連發した、生憎巡査先生、ソコラに見へず、滬上神社に參詣して御化の豆撒を見て六三亭に節分の豆をカジる。

五　天童行

一　蕃樂を聞きながら

三井洋行の關進一郎氏と新村氏と道人と三人で出掛ける、關氏は官話も地方語も堪能で、通譯も道案内も其の上、旅費萬般を支給さる、有難い仕合せである、まるで御父さんに連れられて御祭に行く小供と同じ格である。

時恰も陰曆大晦日、銅鑼と太鼓の蕃樂耳も聾せん計りぢや、大風雪を浴び乍ら泰順と云ふ寧波通ひの船に乗る。

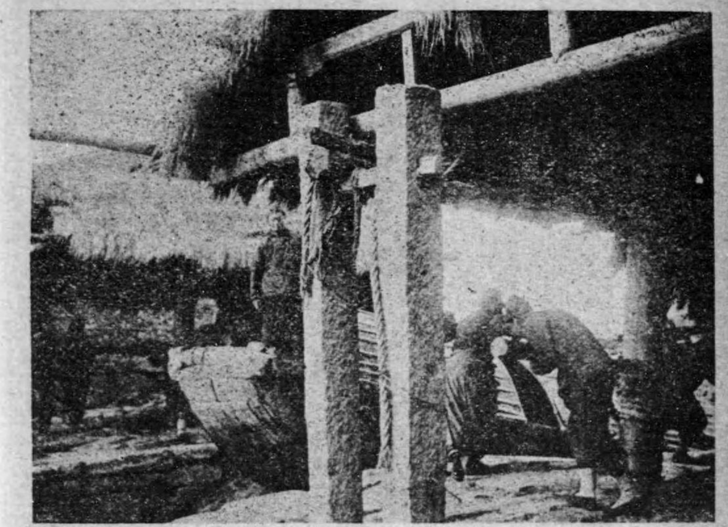
上海商人の多くは、寧波方面から移住して居る爲か、御正月を故郷に迎ふべく家族携帶の乗客多く、其の他苦力や、荷物も夥しい事で、客室は滿員である甲板の上でも、通行の路でも、風雪に吹き晒されながら、薄き蒲團にくるまり横に竪に、足の踏み入れ場所も無き程、積載して居る、道人一行も船首の物置を見出し、兎も角三人が、此の暗黑なる鬼窟に一夜を明かす譯である、途中の景色も船の方向も何も分らぬ。

翌日午前八時無事に寧波に着いた、錢塘江口から左折して甬江に入り、廿五哩計り、溯江した處ぢやげな。

中村旅館の出迎を受て、直ちに同館り入り、雜煮の御馳走に成つて、用意の民船に乗る。

二　輕便インクライン

船は椅子、卓、火鉢、其の他食糧等、中村旅館の好意にて持ち込んである、恰も我國紀元節の佳辰であるから、日章旗を船首に揭揚して得々甬江を溯り、三十分計りで運河にと入る、玆に輕便インクラインとも稱すべき珍妙な所がある、



運河の輕便イングライン

兩岸に各一本宛の太き柱を立て柱に横木二本を渡し、更に太き繩を船に掛けて、七八人の苦力が、兩岸の柱の横木を推して、クル〳〵廻轉すれば、高さ四尺計りの斜面堤防を、ツルリと滑り、上の運河に落ちる仕掛である、是は干潮に水を落さず、滿潮に鹽水を防ぐ爲ぢやと云ふ、隨の煬帝の仕事である、甘い事を考へ居つたわい。

船が橋の下を通る、新村氏は橋の

名を一々手帳に付ける、數へて見たら十三有ると云ふ、鎮東、福明、盛熟、莘新、邦山、瀝蘇、歸敬、鄭家、大聖、大涵山、博通律、天定古大石碶、此丈有る其れから船は白帆を張つて、風に任せて行く、橋の下に來ると帆を下げる、通り越せば帆を上る、高砂の樣に帆を上げて又下げて又上る、厄介千萬な事である（蘇浙見學）に依ると

天童寺佛殿と客堂

橋と橋との間は、大抵廿分間かゝると記してあるが、時計を出して見て居ると實際其の通りである、一定の距離を置いて橋を架けたと見へる。

三　天童途上の風景

船の進むに從つて水が清澄に成る河幅が廣くなる、四河忽ち合したり、兩川時に分れたり、實に四通八達である、兩岸の柳は未だ絲を垂れて居らぬが、大樹小樹が遠く連つて、白帆が樹間に隱顯する、偶々幾萬羽かの一群の小鳥が、飛んで行く。

兩水合する處古色掬すべき石橋があり、前方は遙かに外太白の峻嶺が見えて、深林は帶の樣に其の腰を繞る、連山或は高く或は低く、煙雲縹渺眞に絶景である、西湖も好いが此の雄大さは、寧ろ此ちらが好い。

途中數回も鵜飼船を見るが中々盛な者ぢや、然も大きな魚が居る、天氣は好し氣分は、サッパリして、閑寂な天地は太古の思ひがする、大惠禪師も虛堂老祖も、此の天地に生れ、道元和尙も此の山川風物に育てられたのぢやなと思へば、感慨又無量である。

其の中に鎭蟒塔が見えて、船は小白鎭に着く船を乘り捨て徒歩で約三華里、天童中院を一見し、小白阪に上り鎭蟒塔を仰ぎ、石疊の急阪を下りて、天童街に來る。

四　笊に搖られて

茲に怪體な籠がある、籠と云ふより笊である、笊に二本の竹の棒を通し、籠屋の上着を尻敷に、ヌーと兩脚を笊の中に伸ばす、同じ竹で編んだ下げ緒を兩手に握る、籠屋は前後から二本棒を、兩肩に上せ、頗る怪し掛聲をしながら行く、路は赤色の石を敷き詰て、處々菊の花や桔梗の形を小石で組んで、御丁寧な手

天童寺法堂と太白名山

際を見せる。

新村氏と關氏は、石橋や敷石の石材を金に見積る、何萬圓とかに成ると云ふ。

路の兩側は老松高く聳へ遠く連る遙に竹林を見て、此の間を笊に搖られながら行く、冬の日足の短い時でモー暮かけて居る、ダン〳〵引締つた氣分になつて來た

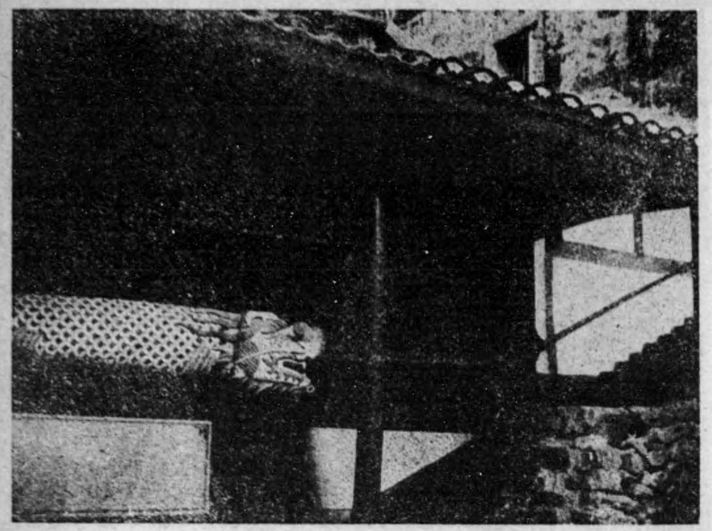
五　天童寺の一晝夜

天童寺の庫裡に着いて客堂に案内

され藥石の饗應に油入りの御馳走を味はつた頃は九時過である、智賓圓曉和尚が款待係で、正月三日間は寺内一同放參であると聞いた、道人一行大いに疲れて直ちに寢る事とする、寢室は長方形二重室、寢臺は三箇向ひ合せとする、木造りの頗る風雅な物である、式は西洋寢臺と異らぬが雅致に於て優等である、蒲團も新らしく毛布も有つて眠り心地甚だ穩かであつた。

翌朝三時に鐘が鳴る太皷が響く爆竹が聞へる、四時に讀經の聲がする、道人も五時前に起て、大衆の背後から大悲咒を讀み回向をして、其れから法堂に上り傳燈祖師の像を拜見する、法堂の正面に佛像は無くて壁畫の大獅子を見せ、額には獅子吼とある、如何にも演法上堂には此で無くてはと思ふ、中央釋迦左右に迦葉阿難、兩壁が西天東土祖師の畫像である、不思議に達磨以後の祖師は髭がある、慈明以外に蓄髮の方もある。

道人の長髪短髭汝怪む勿れぢや、唯洋服の祖師が一人も居らぬは甚だ以つて物足らぬ事ぢや、法堂佛殿何れも二十四五間四面は有ろう、左に廻ると役寮あり雲水堂あり、雲水堂は四方雲遊の僧が、五日十日或は一月一年滯在逗留の處で現在八十六人の雲遊僧、坐禪する、臥坐する、禮拜する、看經する、亂雜極まる者ぢや、延壽堂は養老院の格で、老人計り二十人も隨意生活を營む、涅槃堂は、葬式場、其の横が病僧寮と看護寮、病人も二三人あるらしい、鐘樓が皷樓と向ひ合せにある、次が厨房コックもボーイも居る、右の方が客堂で第一第二第三、五觀堂が食堂で中央に布袋を祭り、皆大歡喜の額には吹き出す、此と向き合ひに、大和尚の座は一段高く厨子形に出來て、前に大卓を置き花と燭と一對上げて、大和尚は佛様の様に花の間に顔を出して、飯を喰ふ兩側に御給仕が二人立つ、大和尚と布袋を中に兩側は、長卓と椅子が無數に並ぶ、五百の僧が一堂に食事する、一汁一菜で御給侍はボーイがする、堂は十八間四方もある、



天童寺食堂の魚板

應供堂は來客の食堂、御書樓は大官高賓の歓待所と知る、禪堂は放參の牌を掛て、現在二百五十三人は常在會下の坐する數。

六　コイツが此奴が

一番奥に方丈が有る、其の横に住職淨心和尚が居る、刺を通じて見ると、多忙の二字で撃退する、其の中に法堂で大般若が始まる、式

天童寺住職　澤心和尚と道人

が了つて和尚が方丈に歸る、後を跟て方丈へ躙入する、止むを得ず逢ふ、茶と菓子を出す、鼠色綿入の法服に赤色金線入の袈裟を掛けた儘で、手鼻をカム事二回、指の尖に付いた鼻汁を、黑檀の卓に、ニジリ付ける、コイツがコイツが呆れたぞ、是で佛樣の樣な面をして御飯を喰つて、臨濟正傳楊岐の眞孫ぢやとサ、此の阿保面を一つ寫眞に取つて置けと、關氏が外面

に引張り出してバチツとやつた。

當寺は曹洞宗と計り思つて居つたら、如淨宏智二師の法系は無い、十方住持の制とかで、三人五人洞宗の人も住持したが、全く臨濟ぢやと云ふ、一體に臨濟が尤も盛で、曹洞此に次ぎ、雲門法眼は微々振はずと申す、山門を出て萬工池邊の七塔を見る、大理石の黑塔と白塔と七基ある、見事なものである、上海の出發一日遲き爲め、除夜の小參、元旦の上堂、二つの式を見逃したのは千歲の恨事であつた。

七古天童

寺男に荷物を持たせ、山に沿ふて竹林を過ぎ、松の木立を潛つて、古天童に參詣する、晋の義興禪師の金塗り像を拜し、十禪師の塔も禮し、三箇の卵塔中、宏智禪師の丈は寫眞に入れる。

古天童宏智の塔と塔守

門前に立つて竹林松林連山起伏の様を眺めると、支那とは思へぬ景色である、茲で門送の和尚達に別れを告げ、例の笊に打ち乘り、小白嶺に揖讓亭を尋ね、鎮蟒塔は遠景に撮影し、途すがら梅花の半開を賞し二時間の後、育王寺へ着いた。

八　育王寺と横濱の兩替屋

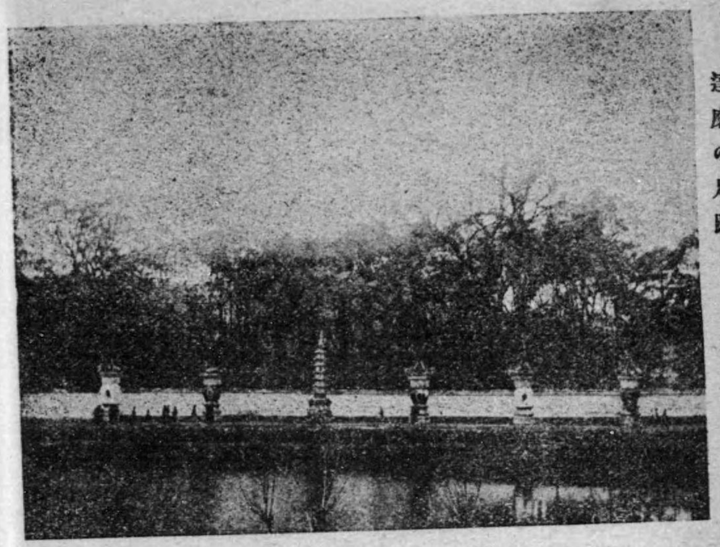
天童よりは稍小規模に見へる、周圍の山はズット低いが伽藍の奇麗

な事に於て勝れる、大體の構造は同じである、經藏と新築の舍利殿を拜見し、阿育王の寶塔もシカと禮瞻する、大惠禪師の塔は矢張り知れなんだ、客堂で御馳走になる。

日語の出來る老僧が欵待をした、其の語る處に依ると横濱に十二年兩換商をして居つたが失敗の結果妻子と別れ、餘生を佛門に送る、春風秋雨四十年日本の人を見ると、横濱が戀しく成ると暗涙に咽ぶ、文字を知らず心願も無く、生存競爭の落伍者が、糊口の爲の禪堂生活、コーした僧侶が隨分多いとの事ぢや當山の住職は病身で、いつも一室に閉ぢ籠り、人に逢ふ事は無いそうぢや、逢つて見た處で大した得もあるまい。

寺誌一部を呉れた、有難く貰ふて歸る。

再び笊に搖られて、寶幢河に出る、昨日の船は日章旗を掲げて待つて居る、今



天童萬工池畔の七塔

度は高砂の帆を捲いて曳き船ぢや日はモートツブリ暮れて居る。午後十一時寧波に歸る、中村旅館では風呂を立て待つて居る、一杯飲んでコロリと寢る。

九　威遠城

寫眞機と砲臺の交換

翌日は中村主人の東道で、汽船に乗り鎮海に着く、招寶山に上る、威遠城の門を潜り、觀音堂に參詣する、遠く舟山列島が一望の下に

ある、近く甬江を上下する、民船汽船材木船中々に盛である、材木や竹を船の兩側外面に奇麗に積み上る、船は寧ろ材木の爲に浮かぶ感がある、此の邊一帶は皆砲臺である。

寫眞機を出して正に撮影せんとする刹那見張りの砲臺番人が出て來て、寫眞機を

天童の大香爐と道人及智賓圓曉

没收すると云ひ出した、關氏はズント恐縮の體である、中村主人は早速の機轉

寫眞機と砲臺の交換なら渡す、明日は軍艦を差し向けるから、寫眞機は大切に保存して置けと云ふと、砲臺番人青く成つて、寫眞機は無事に返し、何處も此處も寫し放題は、氣の毒でも滑稽でも有つた。

午後二時には寧波に歸り、屋根付き朱塗の轎に乘り城内見物である、天封寺の塔に上る、二十四階の絶頂から下を見ると、足の裏がムヅ〳〵して胴震いがする、形は中ブクレの竹筒を立てた恰好である、屋根も廂も無い珍なものぢや。

延慶寺の法會和尚は今年七十六、白い長い髯を撫て、四十を越たら髯を剃らぬが法ぢやと、茶を飲んで濟ましたもの。

十　諦閑和尚の學德

觀宗講寺は天台派である、住職諦閑和尚は、學者で見識もあり德望も高い、天台山の石梁橋を履の儘で渡つて、親しく五百羅漢を禮拜したとの御自慢である

京の建仁寺の開山榮西禪師と同格ぢや、四明山の絶頂に四つの穴がある、此も確かに見て來られた、詩も上手講演も上手である。

此の和尚凡夫では御座らぬ、北京には隔月涅槃經の講話に行く、大官紳商の歸依する者一千人、現時支那に珍らしい高僧である。

去年普陀山の靈地が獨逸俘虜の收容所に確定した時、此の高僧が北京政府に抗議を申し、トーゞ〳〵撤廢さしたと云ふ偉い物で御座る、前清の初期とか中期とか、洪秀全と言ふ男が、耶蘇を奉じて騷亂を起して以來、群衆を集めて教法を講ずる事は堅く禁制と成り、社會と宗教は段々離れて行く、寺院は厭世家の隱れ家か、若くは葬式場か、先祖の祭處と言ふ位に成り下がつたにも拘らず、諦閑和尚は知識階級に歸敬され、東奔西走席暖かならぬ次第ぢやげな、和尚の說に依ると、支那佛教は宗と教との二つに分れる、天台淨土法相三論皆教で、

禪は宗である、教は佛の教へで、宗は個人の宗ぢやげな、宗と教とを兼ねたら尚好いであろうに、

威遠城の上り路

歸り途祐聖觀を見る壯麗な物である、兎ても日本で見る事は出來ぬ建築ぢや、市街の店も片端から本願寺樣の佛壇を見る樣である、

十一　七塔寺と白眞和尚の淨土

寧波第一の大寺である、住職法西和尚は昨年、日本へ行き東西本願寺と各學校孤兒院を視察して、歸朝早々寧波孤兒院を起し、現在七十の孤兒を收容して御座る、參觀の人には必ず其の設備に付いて意見を徵する、珍らしい事業家ぢやそうな。

第二位に居る自眞和尚が、又頗る變り物で三十年來門外に出た事の無い人ぢや碧巖集を昔噺と云ふて居る、俱胝一指頭の話を、身振り手振り面白可笑く話した滑稽さは、思ひ出しても噴出し度なる、但し念佛安心は例に依つて例の如し某甲(無縫塔)有り一見を乞ふと、道人一行を奥まりたる座敷に案内する、幾つか〳〵、錠前を開けては進む、最後に華嚴閣に來た、自分も靴を脱ぎ、一行にも靴を脱がせて、扉を開て入ると閣中に閣あり、一行の入つて仕舞ふを見濟まして、戸を閉ぢた。

八角の室は天井も柱も壁も、大小無數の鏡である、中央の壇上、寶冠の釋迦佛が八尊、七寶の香爐、花瓶、燭、を配し、花幢を釣り、自眞一方の席に華嚴經を繙く、帝網重々の網羅堂に變じ、一華一佛國、一葉一釋迦、甲の影は乙の鏡に丙の鏡影が丁の鏡中に、反射は反射を生じ、無數量不可思儀の淨土と成る、自眞自ら歎じて娑婆に淨土を現じ、凡夫が佛身に成つたと云ふ、コンナ淨土は火に燒ける、風に吹き倒される、コンナ佛身は食ひ過ぎ風引き、熱でも出ると凡夫に返る。

其れでも自眞は結構、佛に成つて、淨土に納まつて御座る、此の位の道樂なら少々金は入つても、御茶屋遊びの惡遣よりは增しと、譽て置く。

先づ杭州寧波の佛法には大抵底が見へて來た樣な。

午晝の饗應も頂戴して、禪堂客堂は素通りに、佛殿を寛て見ると、三十人計りの僧侶が、横を向いたり笑つたり節面白く御經を讀んで居る、二人の若い女人が涙を流して禮拜して居る。

寧波城外の辻便所

佛體は二丈五六尺も有ろう、釋迦、彌陀、彌勒、の三體。

門を出る其處に、七基の石造りの塔が有る、殘念な事に、石工を使つて削て御座る、折角の古塔が新しう成る、同時代の大香爐は、龍の浮彫り古の儘に手際も好く錆

びて好い

一體支那人は妙な癖がある、古い佛は箔を剝がして、新しく塗り換へる、石なら古塔を削り木なら鉋を掛ける。

杭州でも見たが美術思想は無いのかなあ。

中村旅館に再來を約し、午後四時發、新寧紹と云ふ大船で、寢臺を取つて威張つて上海に歸る。

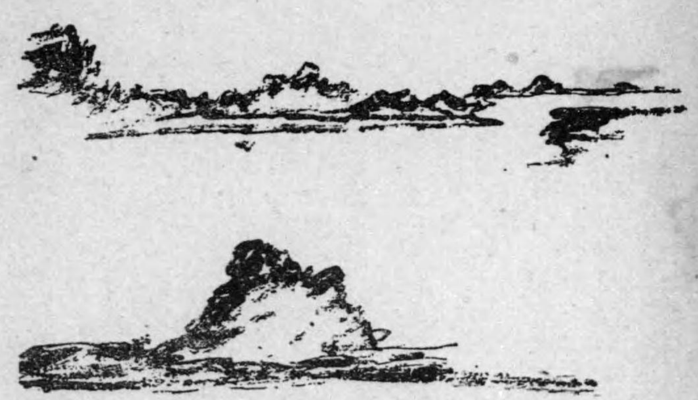
六　上海から漢口へ

一　長江舟中

支那語は一寸日用を辯ずる迄にと思つて遣り始めたが其の日用を辯ずる迄が中々出來ぬ、犬でも來來で來る小供でも煎餅一枚で謝々と云ふ、當年四十幾歳の老學生は同文書院開創以來の珍客でありながら大の鈍物、今以て支那人の談を聞きとれず自分の意思を傳へる事が出來ぬ、是で獨り歩きが出來るなら石が流れて木の葉が沈む、幸ひ鮎川の漢口、北京と油を賣りに行く折柄同行をする事となる。

三月五日上海浦東碼頭から日清汽船の岳陽丸に乘る、一等船室は拓殖局の得能佳吉氏、伊藤洋行の梅崎鮎川兩氏と道人の四人で有つた、船室廣く且つ清潔にして心持頗る好し、出發が午後八時である、時しも雨が降り出したのであるから何物も見る譯に行かぬ、蓄音器を聞きながら眠りに入る。

鎮江は夜半下關は曉天に通るが誰も彼も夢路を辿るばかり、昨日も雨今日も雨大江は赤泥の味噌汁を流した樣なれど何分江幅の廣いのと水量の多い事サスガに大陸ならではと思ふ、江山千里船は右に轉じ左に廻り千態萬狀の光景がまる



船中から見た長江のスケッチ

で長尺物の活動寫眞の如くに眼前に展開する。

午前十時頃に東楊山と西楊山の兩岸相對して奇勝を江中に誇る、東楊山の頂には寺と塔とが見へる江岸の柳は盡く芽を吹て、春雨の中に淡黄を呈し梅か杏か處々紅を見る其間に茅葺の人家が點在し中洲には水牛が怪物の樣に泳いで居る、得も云われぬ景色である鮎川は頻に駄句を並べる』

春雨や長江千里花の旅

三日目の朝は小孤山に來る是は江中第一の絶景と聞く、斷崖數百尺江中に屹立し中腹の樹間に寺が在る、絶頂には塔があつて白い石磴は層々として遠く迄見へる、其の對岸に新樹の林を隔てゝ巉岩疊々竹の子の樣な山がある其の巉岩の間に苔蒸計りの古雅な石造の塔が淡靄模糊の中に見へる、此の邊が紫桑栗里で古へ晉の彭澤縣であるそうな、知縣陶淵明は長官の威張るを癪にさへ、豈に五斗米の爲に腰を折らんやと、即日印授を解いた、此んな風景を見捨てゝ逃げ出すとは陶君も短氣な男で有つた、此の邊は何處でも畫題になりそうな、鮎川は頻と寫眞を撮るが近い處は船が動き遠い處は圖が小さくなる折角の畫題も寫眞には駄目である、四日目の朝湖口に着いた、湖口は鄱陽湖の入口である鄱陽湖は四時共に清澄此暫らくは長江と清濁を分けた流れを見せる。

三國時代に一代の幸運兒周瑜が吳の水軍を鍊る爲に、喬夫人を侍らしめ乍ら旗で指揮をした大孤山は湖中に有る。

漢口公園に於ける奥田澤二氏夫妻

程なく九江に來る名物の磁器スカシ入の茶器花瓶を賣りに來る、案外廉價で土產物には好適品であるが旅する身には邪魔である、此地は唐の潯陽縣で詩人白樂天が九江の司馬に左遷せられし時琵琶行で名を知られて居る

老大嫁作二商人妻一　商人重レ利輕二別離一　去年江陵二買レ茶去　去二來江口一守二空船一

元は長安の妓女で年老いてやる瀨なく商人の妻と成る、前日の榮華今日の落魄商人に見捨られ。昔覺へし琵琶に依り糊口を凌ぐと云ふ悲しい物語り、樂天も曩には都で王者の侍臣今は天涯流寓の身の上同情の一片が此の長篇となる、潯陽江頭今なを彈琴臺の存するありと云ふ。

廬山は此地から約二里で其の麓に達する、廬山は元來鄱陽湖に面し九江は背面で其の山九峰其の水九水、中にも五老峰香炉峰は尤も好く山上八百八寺と云ふが今は洋鬼の避暑地と化して寺院の跡形も無く、白い角行燈の樣な建物が三百計り山一杯に威張り、惠遠法師や陸修靜が草葉の蔭でバタ臭い〳〵と泣いてゞやそうな。

生憎今日は煙雨濛々其れらしい物も見へぬ、李白の「遙看瀑布掛長川」
飛流直下三千丈」も雨あがりの時で晴天十日も續けば牛の小便程も水は
ないそうな、此地から南潯鐵路で南昌に行けば王勃が序を作つた滕王閣がある
と云ふ、是も此の回は縁がない。

座頭跳飛田畝畦　小僧頻捲雪隱笘

此邊は江西省である、馬祖和尚の道場や西江の水が戀しくなる、聞て見れば西
江遠く源流を雲南に發し廣西の南境に沿ふて黔江桂江を合せて廣東省を貫いて
海に入ると云ふ、成る程遠い處ぢや。

江の北岸はモー武穴である憑玉祥が一萬五千の兵を率ひて頑張つて居る、江岸
に露營の兵が鼠色木綿製の綿入の軍服で右往左往する、鎮江も蕪湖も湖口も九
江も江岸は皆鼠色の兵隊が露營して居るのを見た。

船がズン〳〵進んで黄州に來る『斷崖千尺江流有聲』の赤壁らしい者は見へぬ
足掛け五日目の午後二時上海から六百哩の上流漢口に着く、伊藤洋行店員諸君
の出迎へがある店長奥田澤二氏の宅にて懇篤なる待遇を受く。

「誰道人生行路難　朝霞夕霧幾峯巒
悠々萬里長江水　一棹漁歌風月寛」
「遊子時ニ如二不レ繫舟一　江湖漂泊也風流
枕頭難レ結家鄉夢　武穴城邊淡二旅愁一」
「四千マイルの長江の流れ一萬餘噸の汽船が浮かぶ、見せてやりたい安治川隅
田に舟漕ぐ人に」（中村氏作の新磯節）

二　武漢

試みに中華民國の地圖を開いて鮎川の説明する所を聞くと。

大江は源遠く崑崙の峰に發し流れ〳〵て四千哩東海に注ぐ處が上海で其の又上流六百哩の處が漢口である。

長江の流水が支那民族の發達に自然の恩惠を與へたとするなら此の味噌汁が全支那の大動脈で北方黄河が靜脈ぢや。

北燕京に至る京漢線南廣東に通ずる粤漢線が即全支那の脊骨で天津から浦口に達する津浦線や南京より上海の滬寧鐵道は手や脚ぢや、上海と云ふ咽喉から入る物資や文明が漢口で消化されて血と成り肉と成り全支那に行き渡る漢口は中原の心臓で御座る、ナール程、將來支那が統一すれば都を漢口に移すぢやのう漢水の畔大江の濱、九省の會、漢口は只陸上の都市なるのみで無く實に水上の都市である、往來の大船巨舶日々〳〵其の數を增し交通の地域を廣くし年々歲々發展伸張する、經濟的狀態は其の前途を想像するに難からぬ、サレバ英米の資本は此の地に投ぜられ、獨佛の開發は此に注目す川漢鐵道も成否の如何に拘らず一部に着手を見る。

武漢七十萬の人口甚だ少しとせず、漢陽鐵廠湖北製麻等、工業日々〳〵其の盛に趣くあり、棉花、鑛石、毛皮、曰く何曰く何、物産の豐富なる實に驚く可き者がある●

支那全土二十三省、四億民衆、廣漠の大陸無限の物資、指導宜を得、開發日に進まば、將來實に恐る可き國である。と

承はれば中々道理の有る事ぢや。

三　本願寺

輪番田中哲岩師は近頃碧巖集の講義をすると聞き　日本租界の別院に訪問すると　恰も御息女が腦脊髓膜炎で死なられ　其の後は交通遮斷で　今日漸く解除

になつた計り、と云ふ事で早速失敬する。

四　領事館

江岸三井物産材木部の向ふの、洋館の華麗な建物が領事館で、總領事瀨川淺之進氏は、五十餘の親切な人で、河南旅行の注意を懇々と、故郷の孫に聞かせる樣な調子でやられる、玆に中支派遣隊の高津司令官が來合され、一としきり時局問題で花が咲く。

五　赤壁に遊ばず

梟雄曹孟德が周郎に困られた戰場は、黃州から百哩も上流の嘉魚縣と云ふ所にある、赤壁の二大字が石碑に刻まれ、船からでも見へるが景色としては賞美する程の處では無い。

兎も角今南北爭奪の危險區域に屬するから行かれぬ。

東坡の舟游は黃州の赤壁で城外に東坡寺がある、東坡に緣故の聯や石碑や石摺も賣つて居るが斷崖は千尺の十分の一、百尺も六ヶ敷く江流は濁水で太だ殺風景極まるものぢやと聞いて、行く氣はせぬが見ぬのも殘念な樣な心地もする、湖北河南直隸山東との護照を貫つて歸る、序に日漢新報社の岡さんに敬意を表し河南旅行の用意を承はる。

六　伯牙臺

堂西池澤鮎川等の諸氏と共に、帆檣林立する漢水を渡り、月湖を橫斷して、伯牙の彈琴臺に上る、臺は月湖に臨んだ、一小丘に荒果てし門と建物が殘つて居る。

諸名家の題せし詩や文章が壁に刻せられて石摺を澤山賣つて居る、道人の卽吟は

「一曲洋裁人識無　斷琴臺畔屬青蕪

山光水色今猶古　春草萋々遶二月湖」

伯牙の斷琴臺

七　歸元寺

此の邊一帶土饅頭なる墓が累々として見へる、乞食が澤山巣を作つて居る豚小屋も有る、道程約十五六丁も行くと歸元寺である、鍾樓も皷樓も近く燒失した樣子で燒殘りの柱や礎

石が散亂して鐘は材木二本を臺に置き据へられてある、佛殿法堂可なり大きな建物が有る、横手が五百羅漢堂で靈隱寺の物と大した異りはない、戒堂は授戒者の爲に灸を据へる處で、五人計りの僧が頭の天邊に灸を据へられ、熱さうな面をして居る、頭の灸は大抵三ツ宛並べ九ツある、大戒を受けし僧は十二點のもある、支那人は僧俗の區別を頭の灸で識別すると云ふ、般若堂は小規模の坐禪堂であつた、五十人計り坐睡を貪つて居る。

監寺和尙と種々筆談をしたが此の寺の住職は淨土宗の僧で寺は曹洞宗ぢやと申す、住職は信者の選擧で、何宗でも構はぬと云ふ。

今日は不在であるが、此の夏は常州の天寧寺の治開和尙を請待し、法華經を講じて貰ふそうな、坐禪も時々偉い和尙を傭うて來て參禪の要領を聞くそうな去年の秋は宗演老師が御訪で有つたと語つて居た。

辭して門を出ると門側に石碑がある雲岩曇晟禪師開創の事が記してある。

八　晴川閣と大別山

漢陽の晴川閣

閣は漢陽城外大別山の麓に三層の樓閣が長江を望んで聳立して居る閣下の江岸は岩石攢立頗る傀偉、烟波石と云ふぢやげな。

此にも鼠色の兵隊が三三五五出入をする、歩哨も立つて居る、堂西君が種々交渉をするが閣に上るを許さぬ、王占元軍の兵營ぢやそうな。

大別山は吳の孫權が宿將魯肅を祭つて有る處から一名魯山とも云ふ、ホンの一と撮みの山であるが茫漠たる中原の平野と蜿蜒たる大江の流れとを控へて雄威四風を壓するの慨がある。

第一革命の時砲列を布いて漢口支那街を恐畏せしめた山である、今は枯草離々として、才に當年を物語るのみぢや。

九　黃鶴樓

「昔人既乘黃鶴去此地空餘黃鶴樓」圓形三層十八丈の高樓は崔顥一度題して其の名天下に普し、爾後兵亂の爲に灰燼と成り今は赤煉瓦の小さな樓に、張子洞の寫眞が神樣の樣に祭られて有る、乞食と易者と茶館と寫眞屋とは風流を臺無しにして居る。

それでも足を運んで一度樓上の欄に憑れば、「白雲千載共悠々」矢張り壯大雄偉の感はある、「孤帆遠影碧空盡惟見長江天際流」大小大の李白ぢや、兩句で云ひ盡して居る。

それから晴川歴々たる漢陽の樹のあたりは漢陽鐵廠の黒烟天を覆ひ芳草萋々たる鸚鵡州が材木の置き場と成る、勿體無い次第ぢや。

モー一つ五月蠅事には三人計りの銃劍付きの兵隊が胡散臭い目付きをして尾行する事ぢや。

十　武昌城

曾ては革命の義旗に殉國の血を流し今は王占元の根城と成つて北方の重鎮を成す。

陳列館を一見したが粗造の建築で埃と蜘蛛の巣と日本製の商品が僅か計り有る丈ぢや。

ランチで大江を横斷して漢口に歸る、春風秋雨知る幾回ぞ仁丹の廣告とクラブの看板日商の努力が悲しい樣な嬉しい樣な心持ちで見られる。

十一　女の横に喜ぶ

中川さんは今度大阪に轉勤になる、諸同人が集まつて送別の宴が開かれた、池澤君が嬉しかろうと云ふ、ナゼかて（嬉）と云ふ字は、女の横に喜ぶぢやないかは好かつた。

中川さんは思ひ出した樣に、僕の父は何時でも手紙や葉書の冒頭に、南無阿彌陀佛を三つ位書いてある、或る時僕は父に封書は兎も角葉書の南無阿彌陀佛丈は止めて貰ひ度いと賴んだら、父は襟を正して、お前達は葉書にでも書てやらねば、御念佛を申す時は無いわい。

南無阿彌陀佛

七 大冶行

一 全山皆鐵二千年の歴史

思ひ掛け無く中支派遣隊將校十五名と同じく大吉丸に乗り合せ一旦黄石港に着し、更に三菱のランチに乗り替へ、大冶縣に着す。

江岸に大きな日章旗が掲られ、欽命駐箚大日本鑛務管督の札が懸る、洋館の門を潜れば西澤博士住宅客室に案内され待つ間程無く應接室に於て火鞭酒の乾杯で博士二十年來の經營振りから、日支提携の意義等微を穿ち細を盡した談があつて後ち西澤家の御手料理に舌皷を打つ。

翌朝九時特別仕立ての貴賓車で大獅子山の鐵鑛を見る、路程十六哩沿線桃と梨

の花盛り山色水光頗る我が國に似たものがある、殊に渺茫涯り無き長江の旅から轉じて此の仙境に入れば又一種の感興が湧くものぢや。

獅子山は雌雄兩山共に全部皆鐵で無限量である、絶頂から小口堀の崩し取りである、此の苦力が二千人で一日の採掘高が二千噸、之を一回百噸宛廿回汽車で搬出して、江岸からは三菱公司の汽船にて八幡製鐵所に送り殘部が漢陽鐵廠に送られる。

東洋一の製鐵所　漢冶萍公司の經營で鎔鑛爐八個を作る豫定で先づ第一期工事に着手して、同梓包と云ふ處に護岸工事を施して居る全部完成すれば製錬した鐵が皆な我が國へ買ひ取られる契約と聞く。

二千年の歴史　有る鐵山で大冶の名劍は此の鐵を用ひたものぢやと云ふ、六百年前の掘り屑が山積してあるが此の屑から今猶三十六パーセントの含鐵量を

見ると云ふ。

張子洞の發見で獨逸人の技師に命じ調査をさした處非常に有望な處から前清政府に報告する以前獨逸に報告して其毒手が伸びかけた處張子洞大いに怒り遂に我が國の手に歸する事となる、所謂天祐であつたとは知らぬ者の云ふ事で全く西澤大人の腕頭の力であつた。

二　日本の寶物

西大人は大冶の鎮守使と仰がれ支那人間には非常の勢力があるそして信用もある、西大人なら支那人は財産でも印鑑でも無條件で預ける程に懷ついて居る、先年漢口で日貨排斥の起つた時も西大人一度漢口に出張すれば支那側の大商人忽ち歡迎會を催し一夕の酒宴に日貨排斥は盡く解除せられた位である、實に西大人は日本の寶物である、

三　花見の宴

西澤氏庭園に大和櫻が數十株ある幹はもう二尺も有る恰も其櫻花が半開じや枝に瓢を掛けお田お萩を作り一行の爲め宴を開かれた。

萬里異郷の天涯に櫻を見ることは意外の意外、油然として鄕意の湧くを禁じ得ぬ。

四　支那料理

今夕六時から鑛務長季公堃氏の請宴で支那式の接待振り支那料理の享應である鱶の鰭、蓮子、燕巢、木茹湯、杏仁湯、八寶飯、時魚、等種々な珍味の出る毎に乾杯をやる其酒は老酒で釀造より十八年の物じやと聞く、支那の上流社會では女を生むと酒を作つて土に埋めて置く其女が嫁する時持參するのじやそうな。

宴酣にして上席から籤筒が廻される、象牙の籤を一本宛抽く、新衣服一杯とある、座中の一番新しい服を着た者一杯呑む、新娶三杯とある。近頃嫁を貰つた人が三杯呑む、將校連は五人斗りもあつた、主人三杯、大笑一杯、右左二杯仲々面白い趣向であつた此の時に限り銀杯の大なる者で辭する事は出來ぬ、多兄弟三杯と云つた時松崎大尉の男子十五人が第一で有つた、主客歡を盡し午后九時半に江岸に送られ大貞丸で漢口に皈る。

八　少林寺へ

一　河南の平野

漢口三週間は見物と揮毫と奥田氏夫妻の親切に暮らしたが愈々河南入り日程となる。

三月廿六日午前十一時奥田氏夫妻、赤阪、池澤、中道、梅原、等諸氏に送られ京漢線北京行の乘客となつた、一行は道人と鮎川と奥田氏の好意にて道案内者たる支那人汪春華、字は問濤と云ふ男である、汪先生日語を解せず、鮎先生華語を解せず、日支英三國語で互に用を辨じて居る、頗る奇體の道伴もあるものじや。

太抵は手眞似と鉛筆と推察で行く案じた程でもない。

河南の平野、杏花滿開野趣頗る好く湖北の地將に盡きんとして連山崛起危峰巉岩河川繞々又別種の趣きを見る、隧道を拔けて始めて河南の大平原となる、イヤ實に廣いの廣くないのつて武藏野を百も二百も束にして以て來ても相撲は取れまい、行けども〳〵東西南北何にも見へぬ、然も其平野が整理の行き屆いて居る事は又驚いた物じや、棗の林は樹と樹との間隔が二間位でスート目の屆かぬ

少林寺より見る
嵩山の絶頂

處迄ある、柿の林、林檎の林、大したものじやが行儀よく揃つて居る河南の平野は一帶高原地で水に乏しいが農産物の豐饒な事は有數な物である、元來支那の文明は、黄河と揚子江との二大流域に發達して河南最も先づ開發されたと云ふ事じや、此の分では河南省はもう開墾の方面に餘地は無い。

二　兵隊の拾ひ物と護照の光

午后十一時鄭洲に着く筈の汽車は翌朝午前三時漸く着驛銃劍付きの巡警が旅行者の荷物を一一檢査する、道人一行は一枚の護照で檢査を免れ大金台なる客棧に入る知事からの訪問を受て二人の兵士が護衛に來る、道人一行は日本人で有る事の有難味をシミ〴〵感得した。

三　穴居の民族

午前十時鄭州驛から汴洛線河南行の汽車に乘る、昨日拾ふた兵士、張は長官の

許を得て一行に加はる、汜水縣のあたりから穴居の民族を見る。

鄭州以西は山岳地と成つて黄土帶の地層である岩石は無くて地層の各處に斷崖がある、斷崖面は必ず穴を穿つて人間が住まふ、層々蟻の巣の様なのもある、

偶〻家が在つても土の盛上げたもので窓も無い、斷崖のある處は即村落である土龍民族共が其の繁殖の强大さは又驚く可きものぢや、人家は無くて人穴の有る處無數の人類がウヨ〳〵して居る、南方の水上生活なる民族も又此の通りぢや、兎ても戸籍調べも糞も出來るものでは無い、實際四億か五億か知れたものかい。

午後一時には遠く黄河の一部も見える。

二時半には偃師縣に下車一輪車を僱て荷物を運び四十分計りで知事の衙門に着し護照を示して宿を借る。

四　迎賓館

衙門に入ると前任知事嚴と後任知事凌と一縣兩知事で頗る取り込んで居るから門外の迎賓館に案内すると云ふ迎賓館の名は好いが六坪計りの荒ら屋で壁も天井は唐紙で今張り替へて糊の乾かぬ處であるが其の心盡しは嬉しい、六坪の屋は三坪を低い土間に三坪は二尺計り高い土間にして（あんべら）と稱する唐黍殼で編んだ敷物が敷いてある、低い土間には椅子が三脚と中央に卓があつた食事は無論自辨である、此が日本の宿なら先づ〳〵とかヤレ〳〵としか申す處をコレハ〳〵と申してクルクル三度程廻つても中々落付かれぬ、今夜コソはツク〴〵支那趣味の淡き旅愁を感ずるわい。

五　食　事

兵隊の張生と案内の汪生と二人は街に出て食事の注文して來る鮎川と道人は

寒むさに閉口して居る、漢口の奥田氏心盡しの贈り物唐辛の油炒とウ井スキーをチビ〳〵やつて寒さを凌ぐ、程無く運んで來た、食事は、モーモー、と稱する餡の無い饅頭や炒餅と申して粟で作つた砂糖氣の無い煎餅で料理は豚と葱の汁、今夜食事を取つたのは張生計りである。

六　馬牛車

翌朝は茹玉子とモーモーの朝飯を了つて馬車で出發する、其の馬車が中々大したのもである、先づ日本で云ふなら大八車ぢや、板の代用に丸太が十五六本並べて藤蔓で束ねて（アンペラ）の覆が四本柱の上に被せてある、此を牛と馬とが引く一行四人と荷物と馬の食料とを此のボロ車に推込んで行く車が一回ゴトンと轉れば四人は四方の柱にコツンと頭を打ち付ける、暫らくはゴトンコツンゴトンコツンで瘤の二十も製造しながら行く、此の分では少林寺に着く迄に御デコの福助が四人出來る譯ぢや。

七　葬式

此のゴトンコツンで假師の街を進むと向ふから白衣の行列が來る、鐘や銅鑼や笛入りの嫌に騷々しい音樂の中に（アーアーアーア）と喚き立てる女が二人計り有る張生と汪生とは葬式である事を知らした、是は又御座の醒めた泣き女が涙一滴溢すでなく右や左の店を見て會釋しながら笑ひ顏で、アーアーア、を喚く滑稽千萬の者である。

程無く城壁を通り拔けて廣い畑地に來ると畑の中に幾つも〳〵土饅頭がある、屍骸を薩摩芋の腐つた位に心得て畑の肥にするそうな、

八　洛水の失敗

道の二十丁も行くと洛水に來る、汚ない泥水で景色も何もない、つまらぬ者ぢ

や變てこな長方形の箱の様な渡船に馬も車も人間も乘つて對岸に着く、ソコに貧弱な茶店がある、茶店の中には馬方牛牧、二三十の人が休んで居る、道人一行の車が此を目掛けて岸に上つたものぢや、材木の車が茶店の柱にグンと當つたものぢやからタマラヌ朽ちた柱はポンと折れて藁葺の屋根がメリメリと落ちて來た、頭をガンと打つやら腕をポンと打つやらソレで損害賠償をブツタクられると思つてヒヤ〳〵して居ると皆んな大笑で無事に濟んで通過したマアヨカツタ。

中食は拔き　又ガタンコツンを續けてなだらかな傾斜地を上ると曠濶な凸凹の大耕作地で、道は塹壕の中を通つて行く、前も後も見へぬ車を下りて歩いたり、又上つたり大轅轆闘と云ふ城門を潜つて參駕店と云ふ處でガタンコツンの牛馬車を追ひ返し驢馬に乘り換へる、饂飩やモーモーも有るが穢くて手も付けられぬ、生大根の青いやつを喰ひながら中食を拔きに行く。

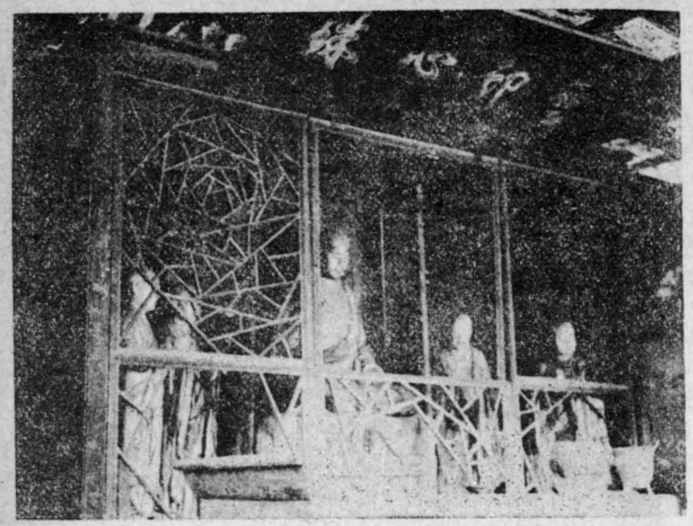
九嶺嶺を越て少林寺へ

驢馬は又コト〳〵コト〳〵と變な歩き方である、此から急勾配の岩山で石路羊腸、ズンズン登つて絶頂に來ると廣い〳〵海の様な大陸を眺めて一寸好い氣持ちになる、二三丁は平坦な道で其れから下り路ぢや、赤土の山に白い羊の群が處々に見へる、弱そうな體格で悲しそうに啼いて居る、谷や山の間を通つて少林寺のある谷の入口に來ると東に嵩山が巍々堂々として碧空に聳へて嵩山の嵩山たる雄姿を見せる、サナガラ屏風を立てた様な、玉寨山が屹立する、鷄鳴山は天の逆鉾の様に逆立をする五乳峰の麓に羅漢柏の森が見へる、森の中の碧瓦桑畑を脱けて横手の門から入ると目に付いたのは、

禪門路濶從他野衲來登
選佛場空任二爾高僧一及第一
驢馬を乘り捨客堂に荷物を卸し。
悟境豁來翠竹舞
禪心靜處白雲閒
と云ふ聯の處で名刺を出して、日本から態々祖師の塔を禮すべく來た事を告げると、德華と素會の二僧が款待をする。

十奇聞

兩僧共に寫不得で文字を知らぬと云ふから筆談は出來ず、汪生に通譯をさせる事とする、當山では住職の事を掌教と申して、即ち少林寺劒法の師範である法系は洞山良价禪師三十五世の孫であるげな、處が我等に向つて、您宗演麼



立雪亭の達磨大師及髓骨肉四高僧

宗演日本幾位有、日本圓覺寺一個てな事を頻に云ふ。
合點が參らぬ汪生に記させたら、君等は宗演であるか、宗演は日本に何人位居るか、日本には圓覺寺が一ケ寺ぢやろ、ハヽア、此の馬鹿坊主宗演とは日本僧侶の稱で、日本とは支那の中の一小村落と心得、日本には寺は一つ丈と思つて居るらしい。
餘りの奇問であるのと、馬鹿らし

いので返事が出來ぬ。

十一　達磨は日本へ

千里を遠しとせず態々此處迄來て、此んな奇問を受けて、アー達磨さんは御不在ぢや、御屁の臭さ味は日本に宿替へした、ソー〳〵達磨さんは去年の秋一寸日本から來て、二晩計り御止まりになつて。

「西來心是東來心」　御屁を一つ

「嵩嶽一峯挿碧空」　と　又一つ

「如今面壁無消息　天間空懸月一輪」

とスカシ屁を「重訪少林立雪場」と最後屁迄放れて、サツサと日本へ御歸りに成つた。

十二　達磨殿

初祖庵の道人と達磨面壁の稗

道人は袈裟を掛けて先づ達磨殿に線香と蠟燭と一枝の梅花を献じて大悲神咒を誦して回向をしたが、ピリツと一種の身震ひがして、聲迄も打ち振へて兩腋に冷汗の流るるを覺へた、ソーして何故か止度無く涙が溢れた、アー達磨さんは此地に御座るわい。

西來祖道末全灰　東海兒孫法施開　面壁誰知眞的意　少林春

色一枝梅

後で風來居士が云ふには、コンな森嚴な氣分を味はつた事は未だ曾て無い、無性に涙が出て、ト云ふたが人間て實に妙な者であるわい。

十三　影石

大聖殿即ち達磨殿の中央の壇上に、達磨佛が鏡の如き目玉をむいて御座る、奴ぬ已の屁を嗅ぎに來た抔とホザイて己に屁を咬ますな、ドー致しまして御屁なぞは致しません、燭を點して熟々拜見すると、木像の前に影石とて眞黑な石がある、「相傳達磨面壁九年影透石內」と云ふのぢや、其影が石の內に透つて居るか否かは道人の凡眼に拜めなんだ。

「法印高提」とは句も好く字も好い、「寢勝覺場」と共に結構な額ぢや。

十四　立雪亭

達磨殿を出て殿後の石磴を上る、此れが立雪亭である「雪印心珠」の額が實に氣に入つた玆の達磨佛は金塗りで印像を結んで佛樣の樣な御面相である、前齒の闕けた處を見せて、それから髓皮骨肉の四高僧が五彩の袈裟を掛け恭しく四側に侍立して御座る、一人の髯の無い背の低いのが尼摠持らしい、それから廓然堂だの千佛閣だのを窺いて、六祖殿を拜すると矢張り中央が達磨さんで左右の背後に二祖と六祖との塑像がある達磨と六祖は像も小さく新しい粗像で二祖の方は像も大きく作も好く大分古いものらしい、左手の無い廣額大耳の頂骨の突起した威あつて猛けからず、如何にも神光老祖と合點が參いる有り難い像ぢや白衣殿の壁畫は少林寺劒法の形を顯はし、或は敵襲を防衛する等の圖で、拙筆粗畫である、西方聖人の古道場には相應しからぬ者ぢや、少林寺劒法抔と何時の頃より此んな魔窟に成つたものかナー、老少共合六十人の僧は皆現に劒客ぢやと

申す。

十五　蛋の巣

點燈の頃に麵と澤庵の赤大根とを頂戴して、二つの寢臺へ四人が寢た、無論蒲團は無い、持參の毛布にくるまつて横になる、眼が冴て氣が澄んで寢入る事が出來ぬ、蚤がモゾ〳〵し出した、頭を搔き尻を搔き朝迄一睡もせなんだ、夜が明けて顏を洗つて見ると全身完膚無き迄にやられて居つた、

十六　初祖庵

法堂と立雪亭でお經を讀んで、粟のお粥を二杯喰ひ、若い僧に案内をさして十五六丁程道を行くと小高い處に荒れ果てゝ塀の壞れた屋根の落ちた初祖庵がある、此ここにも達磨大師は柔和な顏して椅子に腰掛けて、道副、道育、總持、神光の四侍者と共に居られた、壁畫は傳燈の祖師で無準禪師迄ある、矢張り法系は臨濟らしいが恒林和尙は曹洞ぢやと云つて居る。

六祖手植の柏も何うだかナー。

其裏手に達磨面壁の庵がある、少林一則語の碑もある何しろ隨分荒廢したものぢや。

十七　達磨窟

五乳峯は圓い穩かな五つの峯で乳とも見へる、乳とすれば隨分大きな乳ぢや、人間は二つの乳房で、達磨さんは五つの乳房、其上乳汁が無限量である、躋攀するに骨が折れる、仲々險峻である、道人一行は衣を脫ぎ、外套を脫ぎ、チョッキを脫ぎトウトウシャツ一枚で上つた、峯の九合目位の處が達摩窟である石門に「東來壁跡」裏面は「默玄處」の額が有つて十疊敷位の平地の處に自然窟が南面して光線は奥迄這入り、深さは五間も有らう、石像の達摩と二祖とがある。

達磨の足跡

登盡乳峰最上巔　東來壁跡祖師前

達磨窟の鮎川風來居士

千年不拂坐
禪窟月在
嵩山一夜々圓

十八面壁の意味

此所迄來ると東方遙に嵩山のスゴイ姿と前峰玉寨山の壁立萬仞に對して足心のコソバイ事を感じる、二祖の塔處も見へる、少林寺も初祖庵も見へる、乃至山河

二祖の塔

玉寨の鐵壁万丈

少林寺へ

大地草木叢林盡く脚下に蹋伏してナール程達摩の面壁は此處ぢやと頷く、泥で塗り上げた壁を見て日相ボツコをして、虱取りをして居る樣な事が面壁で無いとの合點が行く。

二祖塔

壁は銀山鐵壁、此の萬仞の懸崖を白眼すへ、坐は乳峯須彌の頂上を坐斷して、通上孤危、徹下嶮峻、此の山

に木も無く水も無い様に、大師の眼中に王侯も貴人も無い、廓然不識の御言葉も有り難く承はることが出來る。

十九　釋迦彌勒倒退三千

地は漠々たる中原河南、土壌の肉の眞只中に嶮岩天を摩する骨の嵩山西北四十里に北魏の帝都洛陽を控へ、然も隻手は婁約流支の敵をへし付け乍神光道副の佛種を育て、直心見性の旗は支那全土を席捲し、北邊傳播の舊佛敎を震駭せしめ人格を佛格に向上し佛格を人格に向下さす、新進革命の達摩大師はドーしても人氣男であらねばならぬ。

上は佛壇の眞中から、下は臺所お三の手傳ひ火吹達摩に至る迄「上求菩提下化衆生」の大慈悲、床の掛物に紫印金の一文字、古金襴の中緞子の天地で、住友三菱の奥座敷に納つても成金程の顏もならさず、凸坊凹孃の相手に不倒翁も、不似合でなく、御茶屋の酒杯に平氣な顏で模樣となり、表具屋の看板に寒暑のお小言を仰せられず、天上天下行として可ならざるなく、士農工商所として靈通せぬはない、試みに思へ彌陀が二尺四方の佛壇以外に働けるか、全智全能の神樣が蓆屋の店先で女郎と背合が出來るかい、釋迦でも彌勒でも倒退三千ぢやらう。

其程に融通のきく達摩大師は嘸や八方美人で御座らうと申すまいぞ、昔し天竺で寶球を辯じて以來、今日道人のヘッポコ筆の尖端に現ずる迄古往今來笑つた例しは更にない、宗旨の如何に拘らず、職業の何なるを問はず御目に掛れば御目玉を頂戴する計りである。

二十　瘤の羅漢柏

風來居士が頻りに寫眞を取る、道人は盛に妄想を逞する、山を下りて總門の（少林寺）三大字の額を見、屋根落ち棟傾く哀を歎じ、四天王の塑像が雨露に剝落するを惜み、コブ〳〵の羅漢柏が三人抱へて猶手の届かぬ程なるを賞し、鐘樓の屋根が飛んで胴中許り殘るを笑ひ、石摺五六枚を所望して午前十時半失敬する。

昨上風穴山　今到少林寺　去年此地遊
冒雨亦秋季　一歲一巡行　往返如梭織
衆山盡童々　獨此更蒼翠　古柏列成行
粉壁空呈藝　回首問山僧　感慨思往事
殿宇多傾頽　庭階亦蕪穢　雖梁畫棟間
暮燕雜朝雉　徘徊復徘徊　愧我守土吏
民力不能與
國帑徒何賜　商之登封令　百計籌一二
集金且支撑　聊表扶持意　安得萬黃金

布地爲興廢　相約在明年　秋期應再至
壬辰十月朔巡行憩少林寺見殿堂傾廢慨然久之集
百金暫爲保護實獲我心爲賦五古即用顧亭林先生
少林寺原韻

浙江淡寺廉留草

二十一　大根とウ井スキー

一行四人と今備ひ入れた苦力とボッ〳〵嵩山玉寨五乳の峯に名殘を惜み乍崿嶺の險を越へ蔡家店で苦力を交代させ盧莊で漸く荷馬車を見付け人間と荷物を一と纏に運ぶ事となる土埃りと喉の渴きに堪へぬが途中の茶店に茶を乞へば大きな丼に饂飩の湯出汁を汲んで吳れる、濁つて居るのと臭いので飲めるものではない、幸路邊の畑に青や赤の大根がサモ美味そうに澤山ある、農夫に五錢吳れて大根三本を徵發しウイスキーを飲み〳〵大根嚙じつて七時には洛水を渡り八時には偃師の宿へ着く寨主顏思貌が十五六人の若者を率いて日本事情を聞き度いと訪問をして吳れた、五月蠅ので今天疲勞と追拂つた。

九　洛陽へ

一　朝雲暮雨の感のみ

翌日汽車を待つ爲に半日は空しく過し午後二時出發四時半に河南府即ち洛陽に着く。

城外の大金臺に宿を取り直ぐに城内見物に出掛る、洛陽は方十丁餘りの城壁に圍まれ楡の森の中に眠れる古き都である、今は天津橋上繁華の色は無く天津橋下陽春の水のみ昔を語れど、綠波清迥王爲レ砂の風流を偲ぶ由もなし、楊柳

洛陽城外所見

傷レ心樹と桃李斷レ腸花は傾國の容姿にあらねど朝雲暮雨の感のみ此の地の名物とやら申す。

去れど古人無二復洛城東一　今人還對二落花風一　物換り星移つて此の歌舞の都も徒らに黄昏鳥雀の悲むを見る計りである。

偖て河南府と洛陽が同じ地とすれば臨濟禪師も府主王常侍の爲に說法せられた事ぢやが唐の憲宗の朝であるから尋ねて見樣もない。

二　白馬寺と馬車の徽發

後漢の孝明帝の時天竺の迦葉摩騰と竺法蘭の二僧が始て佛像經卷を白馬に載せて來た舊跡である、洛陽を七時十五分の汽車で八時には義井舖に下車し、テク〳〵二千年の古寺を弔すると、廣い畑の眞中に廢頽した高塀を廻らせる建物は雜草の中に山門と半ば傾いた佛堂と最後に小高い煉瓦積みの臺上に有る方丈兼厨房がションボリして見るからに哀れで秋の末なら、チンチロリンの鳴くに相應しい處である。

塔主の僧に逢て見ても筆談も出來ず何も知らぬ。

其の他畑の中に古い石造の塔が三つ計り有る、佛堂の中に古鐘がある、鮎川は頻りに打ち鳴らして哀音を偲んで居つた。

義井舖から洛陽へ四十華里汽車は午後三時迄待たねばならぬ。

白馬寺に於ける道人と護兵

道人一行の爲に洛陽の知縣から派せられし二名の兵は昨夜も今朝も護衛に任じて居る白馬寺の南に一小村を認めし護衛兵は直に馬車を徵發し來たり自ら鞭を當て十一時過ぎ洛陽に歸る。

三　人間の荒れ馬

洛陽の南三十五里の處に龍門勝概と云ふがある、午後二時車を驅て行く車夫何づれも六尺豐の大漢で後推し付で走る、此の邊一帶に定

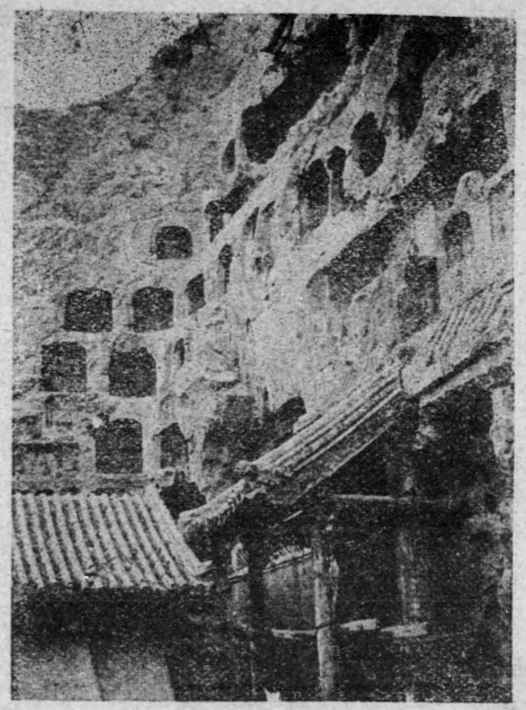
まれる道路は無くて田でも畑でも無暗に人と馬と車が通る、殆ど年中雨の降らぬ河南の平原は此の人と馬の爲に道ならぬ道は灰の中を行く樣に車の轍を三寸位は埋める、其の轍の軋る毎に土埃で道人の黑い外套と車夫の白い法被が同じ樣な茶色に染まる。

イツモ車の先を走る護兵は麥の繁れる畑を走り始める、豌豆や菜の生い立つ畑の中も走る、車は後から何處でも頓着無く走る、溝は飛び越へる、土手は車を荷つて乘り越える、百姓が怒つても知らぬ顏で荒れ馬の樣に畑計りを走つて二時間の後には龍門に着いた。

四　龍門

黑水一名墨嘴と稱する河を挾み兩岸の岩山一面に無數の洞がある、洞中盡く石佛を安置す幾萬佛御座るか分らぬ、洞の尤も大なるものは高さ五十尺深さ六十

尺位で石佛の丈三十五六尺中央の壁に三尊横に廿五菩薩天井も佛と佛の間に花や蔓の美事な彫刻がある洞の入口には二王の大石像も有る、洞の前が石屋で多少の木材を用ひ寺院なれども今は兵營となり約五百の兵は半石半木の寺と石佛の窟中に充滿である。



龍門の佛像

龍門勝概の四字額のある門を潜つて更に河邊に沿ふて南に三四丁行くと五十尺以上の坐像の大石佛が鎮坐します、對岸の山腹には廟がある、樹木もある、風景頗る好し。

南は河南の大平原、西は大行山脈が雲烟の間に見之る、時間無き爲見物もソコ〳〵に歸路に着く行手の人も車も驢馬の群も拂ひ除け拂ひ除け凹凸の道や畑の中を車を牽くと言ふよりは寧ろ擔て八時半洛陽に歸る、往復七十里一回の休息もせず走り續けに走り水一杯呑まぬ、車夫と兵隊は恐ろしくも賴もしくも有つた。

五　再び鄭州へ

翌朝護兵に別れを惜み七時十五分の列車で東行する、義井偃師もイツカ通過し午前十時鄭州に着く市況を一見し汪生は漢口に張生は武昌に歸へる河南十日の旅行は目出度終結となる。

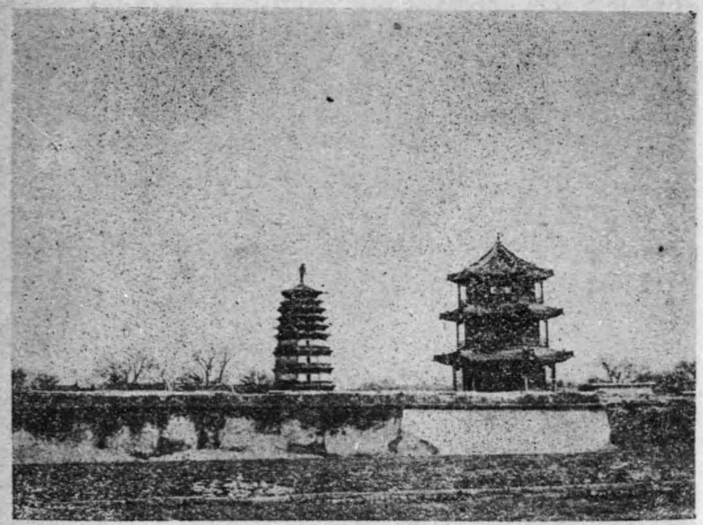
十臨濟拜塔

一　汽車賃二重拂い

達摩さんの次に是非禮拜しようと思つて居つたのは宗祖臨濟禪師の塔である、處が臨濟禪師は大名府の興化寺に全身を葬り、康熙年間既に其の塔も壞廢して跡形も無い、鎮州(正定)城の七面九層、高さ百尺の塔が禪師の衣鉢塔であると云ふ事が安東縣の釋佛海師に依り發見せられた。

臨濟寺は既に廢墟と成つて居るが澄靈塔は今尚現存する事であるから禪師說法行化の聖地を踏み衣鉢塔をも禮する事が出來るなら此んな嬉しい事は無い。

鄭州で汪張二生に別れ心細くも午前一時鄭州發の汽車に乘る、最初漢口から北京迄の通し切符を求めた、河南十日の旅行に通用期限が經過して無効と成り更に二重拂の愚を演じ、恐ろしく長い黃河の鐵橋を夜目に見て、茫漠たる平野を



臨濟禪師の衣鉢塔

ヒタ走りに走り午後の一時半漸く正定に着く。

荷物は多く地理は不明でマゴ付く事夥しい苦力はヒシ〳〵集つて來る、臭い穢ない事兎ても御話にならん。

汽車の發着に乘降者を調べる筈の巡警が知らぬ顏をして居る護照を示しても此は駄目である、其の中漸く一輪車を傭い荷物を積んで鮎川と道人とは車の後推しぢや。

城内は停車場から六支里も南で沙漠の如き直隷の平野に砂のウヂリの中に荒廢した城廓である、中食もせずに大陽の直射する炎天を汗ミドロで嫌な淋しい路を城内へ進む。

兎も角知事の衙門を尋ねて客棧を聞くが要領を得ぬ、知事先生近眼鏡を掛けた色の生白い小男の不愛想な奴で一向に取り合はぬ、ソレハソレハ實に困つた。道人の覺束無き筆談で漸く魁元店と云ふ名のみの客棧に案内されたが護兵も付けず、澄靈塔も教へず便宜も與へぬ心細い事限り無い。

二　澄靈塔

兎も角魁元店の老爺に荷物を預け細道を幾度も曲り溜池の横を過ぎ、ドーカコーカ天寧寺迄來ると門に

古寺無人明月照　山門不鎖白雲封

とある、小さい寺で成程住職は無い佛堂も錠が卸されて中を見る事さえ出來ぬ横手に年寄の夫婦者が住まつて居るが何にも分らぬ。

此を出て古い池で三面を繞らした高塔が澄靈塔で有つた、七面九層此に間違ひは無い、但し塔の入口は四方共煉瓦で詰めて入る事が出來ぬ。

塔の前面に二基の石碑は有るが讀んで見ると元山中に有りし塔を此こに移したと云ふ。

刺摩綽思惺吉の撰文に成つた者で有つた一つは塔が燒けて再建したと云ふのであつた。

澄靈塔で有る事丈は確であるが、臨濟禪師の木像も佛海師が掘出した碑文も見付からず三回も四回も塔を廻り或は仰ぎしても物足らぬ感である。

棲嚴神咒を誦じて恭しく回向し追懷此を久うす。

鮎川に促されて遂に大佛寺へ向ふ。

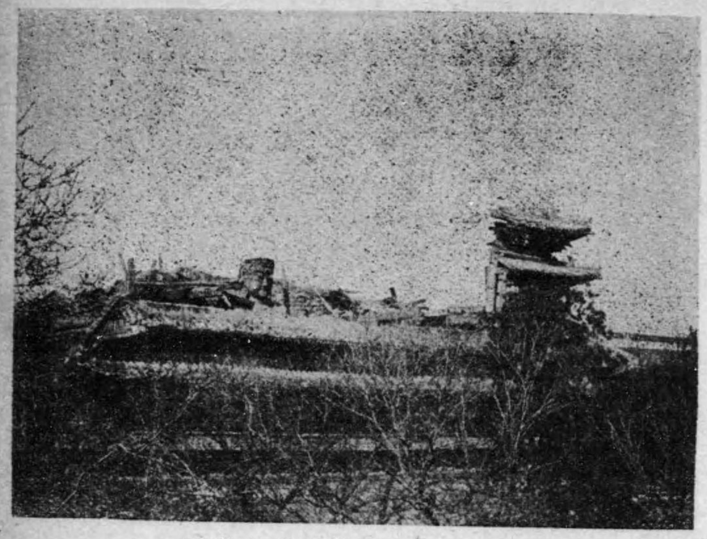
三　屋根の上に首を出す佛

是は又意外な大建築康熙乾隆の御筆の大理石の碑が幾個も黄瓦の屋根を葺れて立てられてある。

佛殿は七層の建物で三層以上の屋根の一角丈奇麗に殘り餘は盡く落ち第四層以下は全部殘る、爲に佛像は屋根の上に首を出して衆生を視そなはして御座る七十五尺の銅佛で寶冠は佛の御前に落下して青錆が浮いて居る。

四壁は頗る手ぎはの好い塑像の、文殊普賢と三千佛が雨に撲たれて落剝して目も當てられぬ哀れさである。

奥行六十間幅四十間の伽藍堂は柱一本クル井無く儼然として屋根無しに建て居る。



臨濟拜塔

屋根の中から首を出す大師

大佛寺一名興隆寺は觀音薩埵の道場なりと云ふ、御製碑文もある、三層の經藏が又非常に立派で廣大な者で直徑三十尺位の輪藏は兒童の三四人でクル〳〵廻轉する、二階三階皆羅漢や十王が祭つてある輪藏も佛殿も全部一坪位な切り石で敷詰めて佛像の前には鐵製湯屋の浴槽程の香爐が有る、其の他禪堂客室もある。

當時の全盛思ふに堪へたりぢや。

四　讀書人と客棧

魁元店を出る時から目付の惡い四十男が二人道人と前後して後を跟けて居る、澄靈塔の道も教へた、大佛寺の講釋もしたが歸途梨子を買つては道人に代價を拂わせ貰を買つては拂はせする、トードー魁元店迄送つて來て頻に筆談で銀子有りやとか北京へ同行をするとか、云ひ出した、汝は何者かと問へば、讀書人ぢやと答へる、讀書人は即ち浮浪人であつて支那人中一番厄介な者の名稱である、サア困つた

（客棧）

客棧と申して二坪位な建者で例に依り土間で椅子が二脚と卓とある丈、豆ランプが薄暗く點されて土間の一隅に荷物を積み、饂飩の油炒と云ふ變な御夕飯を三分の一計り平げて寒さにフルへて居ると例の讀書人がヤツテ來た、ソーして喰ひ殘りの饂飩を持ち出して先づ腹をコサへて又來た、此れから酒飲みに出ようとか北京行の切符を買つてやるから銀を出せとか毛布が上等だとか中々動きそうに無いが怒る事もならず、ソレデモ今夜疲勞甚しで追拂つた。

追拂つたものゝ夜襲に來ぬとは限らぬ癖者第一用心の惡い此の房の戸はガタガタで窓は紙が破れて燈は暗い薄氣味の惡い事ぢや。

ソコデ鮎川と二人は今晩討死と覺悟を極め外套も脱がず靴もはいた儘洋杖を前に毛布を敷いて坐睡の姿勢ぢや、イザと云へば打きつける用意をして燈を消し息を殺して待つて居る。

イツシか夜も更けて晝間の疲れにグツスリ寢いつた、恰も狗の子の樣に鮎川の頭が道人の腋の下に入り道人の頭は鮎川の横腹を枕にして無事に夜は明けた先づ〳〵命には別條も無かつた。

實は天祐で隣房に陸軍の募兵係りが宿つて居つて夜通し馬で荷物を運んで居つ

たから彼等に其の間を與へなんだのであつた。

翌朝早々一輪車で停車場に馳せ付け五時間の後漸く十二時半の北上列車に投じ始めて安堵した。

臨濟は白拈賊と云はれる程で御墓參りの孫共に迄、コンナ憂き目を見せられた一生忘れる事の出來ぬ語り草である。

午後七時全身黄塵を浴びて北京に着く、扶桑館より迎ひの馬車に乘り同館の浴槽に河南十日の垢を摺り落し疊の上にヤレ〳〵と寛ろいで神武天皇祭の祝日に目出度く日本の酒を酌む。

十一　北京入

一　燕京案内

鮎川は地圖を開ひて又説明する、抑も北京は虞舜の時に幽州で、春秋戰國に燕で秦の時代は漁陽、漢に成つて廣陽、遼が朔北から入て、初て都を建て、金と元とは次て鼎を此の地に定め、明の永樂帝が南金陵から、遷都して北京と稱するに到つたが、愛親覺羅氏一度立つて明に代り前清三百年の基を開く。

内城は周廻四十里高さ三丈五尺五寸、城壁の厚さが六丈二尺、四隅に角櫓が有つて不正長方形の構へ、墻壁に一萬一千三十八の銃眼、二千百〇八の砲眼がある、城壁の周圍が護城河で猶外城が其の南に、八里も築かれて、實に金城鐵壁である。

地理から言へば東勃海を包み、南三齊に接し、西が太行山の險で北は名にし負ふ居庸の堅關、一卒樓を戍れば朔北百萬の征馬も鋒を返すと云はれた處。

交通には京綏鐵道で綏遠城に至るを得べく。

京奉鐵道は東三省に直通し、天津から南轉すると江寧の地に達ずる、京漢線が漢口に達して西轉太原府に到るを得る、所謂四通八達の地、中國建都の形勝と云ふ事が肯定される、されども世運は永く太平の夢を結ぶ事を許さぬ、此の金湯の固が、光緒二十六年外國兵の蹂躙に委するの止む無きに至り、宣統の世に到つては、武漢の革命遂に黄龍旗を倒して袁を逐い黎を推し馮を擧げ張勳の復辟功を奏せず、兎にも角にも共和國として存立する事に成つた。

星霜悠々七百年、全支那の國都として全支那政治の活舞臺として大に、感興を引く事である。

成程君の説明は理路井然として能く解る、案内記は餘りゴタ〳〵して得と呑み込めぬから猶實地に付いて逐一承まはろふ。

では參りませうと馬車を馳て見物に出る。

二　地家の氏神

大聖孔子先生を祭つた處を文廟と申す、先師廟門と稱するのが正門ぢやが、持敬門とある通用門の方から入ると柏樹が列を成し、元朝以來の進士題名碑が幾十基と無く立てられ、大成殿が滿庭の古柏に擁ぜられて、黄瓦丹壁壯麗な建築である、正面は(至聖先師孔子神位)で、四聖十哲が左右に排列し、楣間は康熙帝御筆の萬世師表と云ふ四字額、其の他清朝歴代の匾額も有つて、結構には相違無いが、道人には地家の氏神様に參つた程の有難味も起らなんだ。

大成門に來ると門内左右に各十二の戟を備へ夫れと並列して、石皷各五個を排置する、皷面は何度も〳〵も摺本せられて、眞黑黑助刻文も剝落して譯が分らぬ。

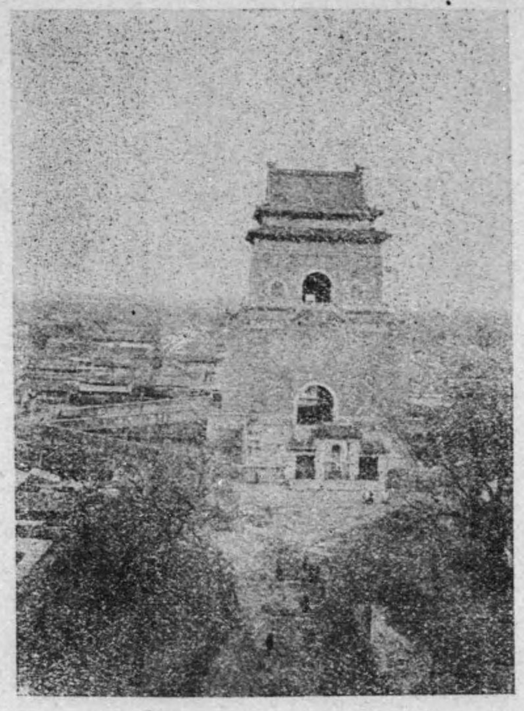
石皷は今から三千年前、周の宣王が陝西省岐陽に獵し、射騎に秀でた者の功を

表したのぢやそうな。

高さ二尺餘徑一尺二寸、其の數が十箇である、三千年來幾度か轉々草野泥土に委せられて風雨剝蝕、文字の現存する者僅に三百二十五字ぢやと申す、其文字が宣王の臣史籀の筆に成ると傳へて居る、三千年の歳月を經て、天地の間唯此の石のみ存すると云ふ、支那學界の珍品で御座る。

三　皷　樓

長さ十六丈八尺幅十一丈二尺、高さ九丈九尺で煉瓦と巨石と大きな材木で、堅牢に出來た建物である、東側の巡警控へ所に刺を通ずれば巡警が樓下の門を開いて登らせる、石階六十九級中々の急傾斜である、樓上に登れば景山、十刹海、荷塘も見へる、老槐新柳の中に市街は雜然紛然としてある、西、大行の群巒朔邊を區劃し、東、雲烟緲渺の曠野を望み、實にハや天下の壯觀で御座るわ。



北京の鐘樓

鐘樓は同じ樣な建物ぢやに依つて先づ、此で眺めて置く、

四　雍和宮

雍正帝登極の後、曾て親王たりし時代の潛龍邸を喇嘛に寄附して、宗教を利用し西藏蒙古の統治權を掌握した、賢明なる政策の遺物ぢや現存約三百の黄や紅の衣を着た、體格偉

大の蒙古僧が、國費の内から若干の銀と米を支給されて、毎日念佛三昧に明し暮して居る、門錢と稱する木戸錢を拂つて雍和門から入ると廟内は雍和宮、永祐殿、法華殿、等が蒙古式佛像佛畫で飾られ、中央正面の刺繍無量壽佛の曼陀羅や、背面五百羅漢の

大成殿の獅子と道人

彫刻は、精巧を極めたものぢや、其の後方の高殿に一本の大栴檀で出來た、五丈餘の大佛樣、其の東側に抱き佛、和合佛、抔と稱する、十二箇の一種怪體な佛樣が御座る、是は風俗壞亂の惧れから官憲の取締と有つて、白布で以て局部を覆つてある、イヤ隨分思ひ切つた佛樣を造つた者ぢや元來喇嘛は秘密宗ぢやと申すが、成程秘密宗に相違無い、此の御宗旨が一番世の中には信徒を多く持つて居るぢや、禪宗や

大成門と風來居士

律宗の様な顔して居つても、此の白布を取り除くと、案外喇嘛教奉載者で有つたりする。

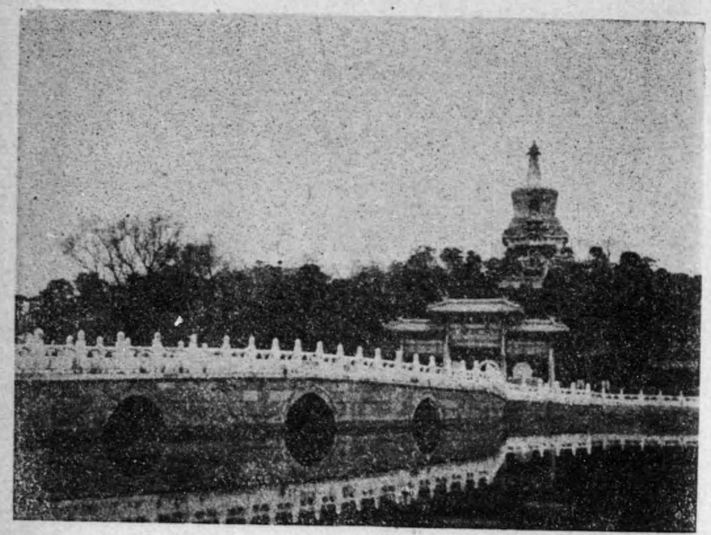
此の佛様の御姿を一組十錢で賣つて居るが、鮎川も信仰を以つて居ながら買はずに出た。

五　北海と景山

宮城西華門の西に太液池がある、南北中の三海に成つて、夏は貴妃嬪御の納涼冬は八旗の武夫が氷上射騎の場で有つたと言ふ事ぢや、今では中海に總統府南海に副統府を置いてあるから縱覽は出來ぬが、四百餘州の政令は此の池中から出て來るのぢや。

北海丈けは特に外人の任意觀覽を許して居る、外交部の入觀證を示して入る。

華麗な石橋を渡つて、瓊華島の鬱蒼たる樹木の間を脱る、佛殿を拜し絶頂の望



北京の瓊島

樓に上つて背面の方へ下りると、人造の奇岩怪石が無數に有る、長廊や宮殿が壞れて行く儘に任せて埃の山や雨漏の跡を見せて居るがサスガ遼、金、―元、明、清、五朝の宮殿、雲上縱覽の場處丈に、景色も好し規模も大きい、鮎川は迷宮を出て迷宮に入ると申して居る。

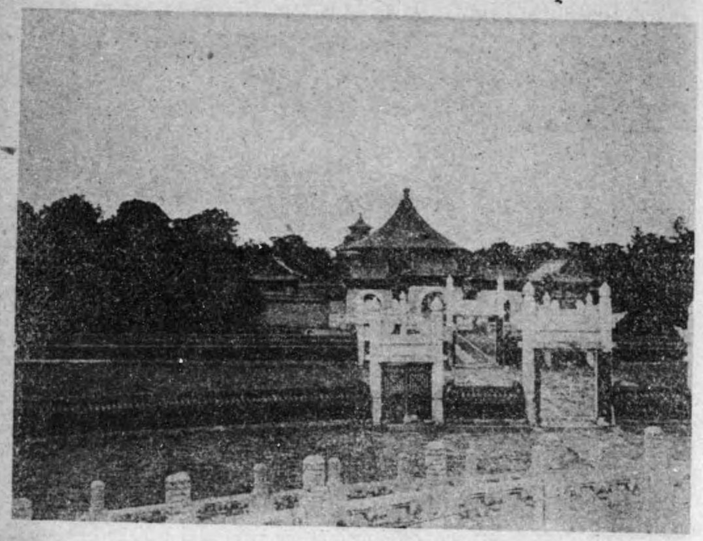
煤山炭海は元の世祖が築城の際、北京籠城の場合を思ひ、燃料とし

て貯藏した、石炭の山であるそうな、此地は入る事が出來ぬが、遠眺すると成程人造の山らしい、今は樹木が繁茂して、山上に五亭を見る、結構な公園である。

六　紫禁城

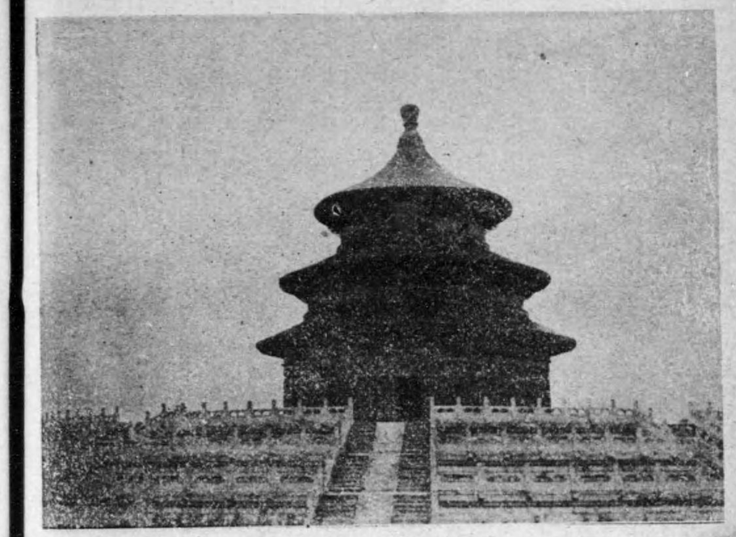
其の規模の大なる事、建築の壯なる事實に驚いて仕舞ふ、皇居の正面正陽門中華門、天安門等、兎ても想像の付かぬ位、馬鹿太いものぢや、太和殿、神武門等、堂々たる宮殿なり大門である、黄瓦燦然丹彩朱畫輪奐の美を盡したもの御路と稱する大理石に龍を彫刻した路は、天子のみ歩みし處の路を、今は外人も土人も歩いて行く、實に哀れな事ぢや。

始め二圓の木戸錢を拂つて、更に古物陳列場へ一圓の木戸錢が要る、武英殿の東廂、凝道殿に入ると、熱河奉天の離宮に珍藏されし、清朝の御物康熙乾隆時代に、財力と威力を以て蒐集した七寶の器物珊瑚青玉翡翠琅玕等の寶石で造つた盆栽を見る。



北京入　祈年殿を望む

武英本殿の正面張旭と文徵明の書其他山水の畫、銅器、陶磁器、漆器、堆朱、象牙、寶石、等の細工物、彫刻物、玉硯、銀皿一器一物眼の玉が飛び出て涎が流れて、實に早や困つた男と思はせる、周漢の古器が幾個もある古色蒼然雅致に富んたもので出家の道人にも夕

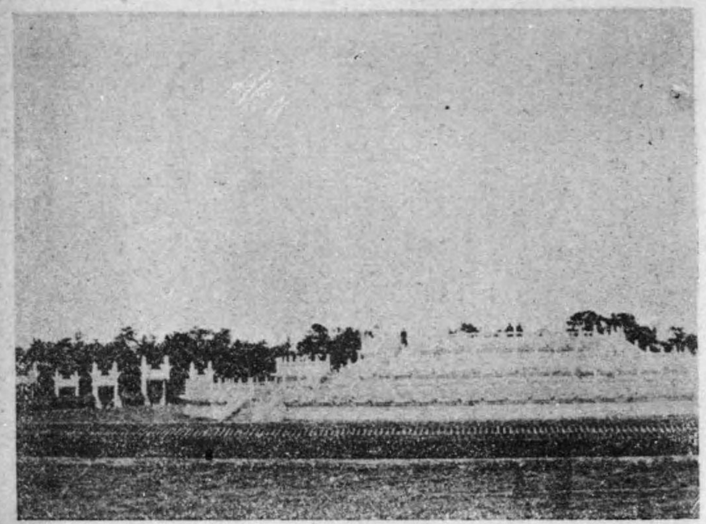


祈年殿

マラヌ欲心を起させるわい、東華門で茶館に入り高價ひ御茶を飲んでそれから。

七　天壇

へと出掛る明の永樂年中に建設された者じやと云ふ垣墻を繞らす十里、門内に齋宮、圜丘、皇乾殿、祈年殿等がある、松柏欝密深沈たる者がある、中門を入つて右に折れ橋を渡つて、簡單な玉座を見て夫れから天壇と稱する圜丘に上る



天壇

壇は三層で最下段が徑廿一丈中段十五丈上段九丈高さ一丈五尺で其形は圓い、全部が大理石である、次に碧琉璃の瓦で天を磨する圓形祈年殿に行く、是は天子自ら五穀豊穣を祈る處、誰人の惡戯か龍の首が取つてある、此も外交部の入觀證が要る。

此位にして宿に歸る、御夕飯後骨董を素見すべく、前門と申す街に行く。

八　古玩と姑姐

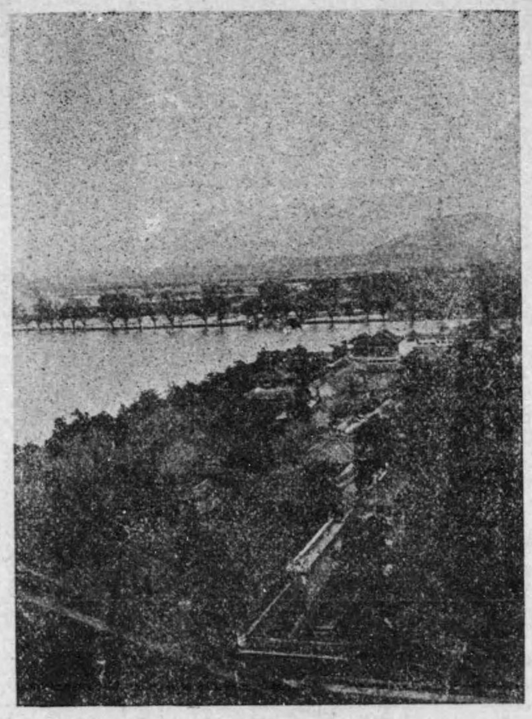
骨董を古玩と云ふ、藝妓を華姑娘と唱へる車夫め古玩と姑娘を聞き違へ、大きな茶屋へ案内した。

土藏の樣な建物を入り二ッ三ッ曲ると、受付がある、女が五人宛五組位出て、行儀よく頭を下げて引き下る、ドーモ變な工合であると車夫を呼んで聞くと氣をきかせたのか聞き違ひか藝妓屋であつた。

御蔭で北京一流の華姑娘も一見した譯だ、鮎川は一人で悅に入つたが五回續けて來ねば遊ばさぬと云ふので鮎川めヒドク落膽して銀一弗を拂つて出る。

九　萬壽山

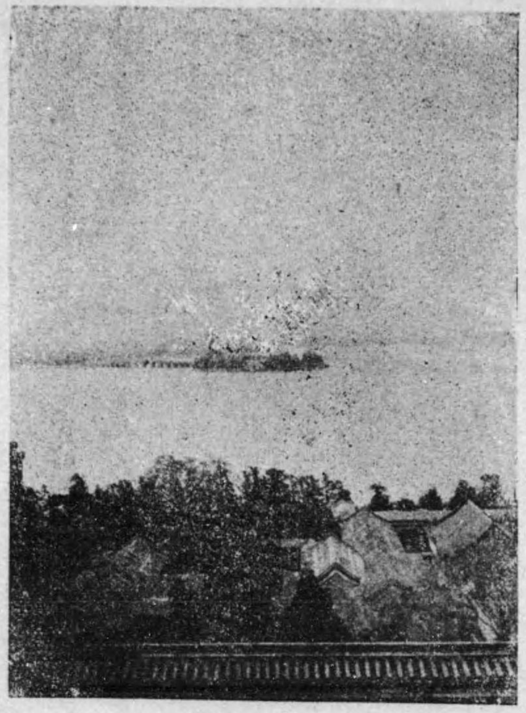
翌日萬壽山頤和園に馬車を驅る、二圓の入場券を買ふて小門を潛る、仁壽殿の前に出る、銅製の龍、鳳や金魚鉢の大なる物がある、松柏の木立ちを過ぎて、玉瀾堂を見て昆明湖畔に出ると高閣空を凌ぎ波光碧を湛へた山紫水明の境で、遙かに龍王廟の樓閣と玉帶の長橋が湖心に浮び湖を隔てゝ玉泉の白塔も見へる湖に沿ふて石の玉垣を傳ひ樂善堂の前に泰山石が蔓に覆われてあるのを見て西邀月門を入り假山を見ながら長い長い廻廊を行く、丹碧を用いて山水花鳥が畫いてある。



排雲閣より玉泉山を望む

排雲門迄來ると更に一圓の入觀料を取る門に入ると各殿實に雄大で金碧燦然一段は一段より高く、殿前に龍鳳の香爐が有つて、玉座に西太后の眞影がある、それから雲錦殿玉華殿排雲殿の後は便殿其の左右が紫霄に芳輝の二殿左に曲つて階を上る九十餘級、更に左に折れて乾隆帝の大理石樓、更に北して寶雲閣は一屋全部銅作で木は一本もない、巧妙な建物じや、右に折れて石の墜道を縫つて、佛香閣の西に出る、脚下に昆明の湖水、遠く西山の晴嵐が一幅の畫となつて、得も云われぬ景色である、後方の萬佛樓には彌陀が祭られてある、萬壽山昆明湖と云ふ一大石碑がある、再び排雲門に歸り、廻廊傳に西し秋水、清遙、の兩亭を經て西端、寄瀾堂の傍に浮べる石舟に乘る、舟は大理石の二階屋形で茶館に成つて居る、更に北路山上に廻り湖山の眞意を味つて、西北一帶の山村を望み煉瓦敷の路を東して山頂で辨當を開き、徳和園の大舞臺を見て再び仁壽

殿を過ぎて、先づ一通りの參觀は濟んだが何だか夢の様にボーットして昔遊んだのか今尙遊んで居るか恍惚の裡に在る秦の阿房宮も此んな物では無かつたらーかと思ふ、兎も角清朝三百年の夢は、今猶萬壽山に彷彿する事が出來る、玉泉山香山、碧雲寺、湯山



湖中の石舟

其から明の十三陵も見度いが、鮎川は三度目の見物で行かぬと云ふ、金と時間

が無いと見物は出來ぬ、モーヨイヨイ、白雲觀、黃寺、黑寺、北京名所は中々多いが、宿料と馬車賃と此も中々掛かる、道人の見物は達磨大師の御庇の景物モー此で澤山である。

序であるから農園丈を飯り路にノゾク、見る程の事は無いが門番の大男は八尺斗りの大漢二人迄も揃ひ仁王宜敷の體である、鮎川は七尺五寸位と云ふが、道人の如きは彼大漢の腰迄シケヤ無い、八尺あると思ふ、生れて以來此んな大漢は見た事が無い。

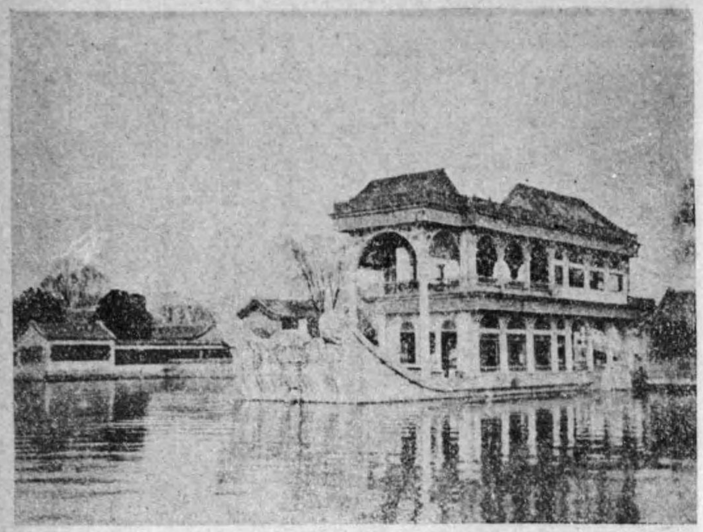
十　又來るか來ぬか

又來るか來ぬかは分らぬが、馬鹿に疱大の都で有つた、道人一生忘れは致さぬぞ。

午前八時の汽車で、天津に向ふ、西方遙に雪の嶺きを見、五台山じやと云ふ人もある五台山は見へぬと云ふ人もある。

北京東去天津路
遙見西方雪嶺聳
誰道清涼化城處
春風不レ到五台峯

十一時半天津着、法祖界伊藤洋行の食客と成る、店長石黑昌明氏又客を愛す、先ず當分は此で休養する。



北京萬壽山の石舟

十一　天津

は舊都で無い隨つて名所も無い一の商業地に過ぎぬ、咸豐八年の天津定約で開港し、行政百般外國式で遣つた結果、遂に今日の盛況を見るに到つたと云ふ。

先づ輸出入に於ては上海に次ぐ、支那唯一の貿易港である、道人には一向用事の無い所で見物もしたが何等の感興を引かん。

回々教の清眞寺に參詣をした、此は一寸異つて居るが大體支那式寺院で佛壇は無い黑白のダンダラ幕を垂れて、床板が有つて、二人計りの信者が禮拜して居つた、異教徒を嫌ふの風があつて說明も何んにも聞かなんだ。

敕建李公祠に李鴻章が祀つて有るが大した事も無い、各國の專管居留地も評する程でない、白河に沿た露國公園の金色の塔が蓊鬱たる老樹の森に聳へたアタリ捨てがたい處もある、天津は去年九月から一滴の雨も降らぬと云ふ道理で綿花羊毛の荷物が覆もなく、野天に積堆してある、空氣の乾燥する餘り結構でもない所じや。

或日の事天色赤く、ソコラ一面暗淡たる光景になつた椽も座敷も灰を撒いた樣に成つた、是れは風の爲めに蒙古の沙漠の泥が天迄上つて、此に下るのじやそうな黃塵萬丈は此の事と聞かされた、ても恐ろしい處である。

一寸異ふて見へるのは日本商店に藥屋の多い事で、現に藥品の純利が、年々四百萬圓を下らぬと云ふ事である。

一體に天津は靜で穩な處の樣に見へる。

四月十五日午前十一時天津出發午后九時濟南着、五分間で危く山東線に乘り替へ、翌朝午前十時に靑島に着く、伊藤洋行主任淵田氏の好意で一先づ吾妻旅館の客となりグランドホテルに午餐の饗があつて舞鶴濱妙心寺主任細川氏の同情に依り暫らくは此寺の一室に假寢の夢を結ぶ。

十二　青島へ

一　櫻の榮へる處

海中の一小島青島から得た名で、島は日獨戰爭により加藤島と改名せられて居る、曾ては此島以外に青ひ物を見なかつた青島は、獨逸の經營其の宜しきを得て四山盡く青松特に大和櫻は數萬株を移植して、其れが又頗る繁茂して居る、由來櫻の榮へる所は我が大和民族の發展する處で、青島然り大治然り、遠く南米北米も移植して、櫻の國の領土を擴大したい者である。

秋山民政長官は慶應出身で楞伽老師の同窓とか先づ、淵田氏から紹介されて、細川師鮎川も同道敬意を拂ひ、署長中野氏にも途上ながら挨拶して、

二　小學校

を參觀する獨逸式の建築で其の頑丈さ、其の清潔さ其の精巧さ、驚く外はない恐らく日本では兎ても東京にも見られぬ程の物であらふ。

青島小學校は第一第二とあつて、千五百の兒童が通學し、中學も高女も昨年開校したと云ふ事じや、支人教育には支那學堂を設け、一切支那式で只日本語の一科を加へ、濟南、李村、潮天、卽墨、膠洲、淄川、等教育の範疇は、殆ど遺憾なき迄に進んで居ると、校長さんの話じや。

鬼頭玉汝氏は青島新聞の社長で品川彌二郎さんを慕ひ峩山禪師にも相見し愚庵や元策の友人で有ると、自ら名乘られ、奇骨稜々の人で大に道人の同情者であつた。

三　本郷大將

鬼頭氏の紹介で司令官本郷大將を訪ふたが（當時中將）一見溫厚の君子で然も快活能く談する人である、高岡親王が印度に渡り虎の爲めに咬まれた話もあつた

近く宗演禪師來青の談も出た、辭するに當つては玄關迄送られた、本鄕大將の好意で、司令部の自動車を貸與され川崎副官が戰跡案内及び説明をせられる、先づ旭山の忠魂碑に誦經し、萬年山の絶頂に地圖と對照して、大正三年青島陷落の顚末を目に見る如く説明せられる、旭公園花の墜道を撮影して皈る。

四　九水見物

今日は山東鐵道部長阪口氏の厚情で、自動車を指し廻され、九水及柳樹台の奇勝を探る路は萬年兵營から李村に脫け、浮山山脈を左方に眺め、一路坦々疾走二時間にして、柳樹台に着く、奇峯怪岩道轉じ谷廻つて、水清く李花滿開の中、三々五々の支人茅屋あり幽情塵寰を隔つの思ひあり、此より三十分間にして九水に達す、山下に自動車を待たせ置き、妙な山籃で山頂に攀ぢ上ると、半倒半壞の洋館が澤山にある、元と獨逸人の避暑地や病院の設備もあつたが、大正三年に自爆したそほな、山間や窪地の所には櫻が數十株あつて、奇岩聳立犬牙錯綜の樣、實に賞すべきである、此所より五里にして、龍王廟があると云ふ事じやが、引廻へして自動車上の人と成る。

五　司令官邸の園遊會

三井物産の顧問、有賀長文氏飯塚氏、其他二三の實業家と共に、午餐の亭あり官邸の櫻花滿開、一目數百株の花を下し見る、華麗言葉に盡し難し、旭公園は櫻花滿開春色正に酣で、馬車と自動車は引きなしに公園に行く、サスガに新領土日本人の勢力は大した者である、上海の悲觀も、此の清き水で洗ひ去られた莨も酒も食事も言葉も通貨も皆日本物で、日本に皈つたと少しも異らぬ、其の上水は青く山は碧で、實に氣持ちがよい、小數の獨逸人は見る影もなく支那人は奴隷に過ぎぬ處ぢや司令官邸の園遊會に招かれる、武術試合が有つて、櫻と

武士を結び付けた、本郷大將の挨拶が濟んで、模擬店で麥酒の御馳走があつた

六　椋十の本物、饂飩の御馳走

膠洲灣の三日月溫泉で、峯村正三森田龍起淵田鮎川諸氏と會飲する、鮎川が苦野で道人が椋十と名乘りを揚げると、イヤ本物の椋十はツイ憲兵隊の前濱松町に居ると森田氏から聞かされた、翌日澁川玄耳先生からの電話で早速出掛ると成る程本物の椋十先生、青島で辨護士をして御座る、饂飩の御馳走で泰山の話も聞き本も貰うたが逢つて見たら思つた程の年寄りでも無く、田舍者では猶更無ひ。

澁川氏は

掌に春が蠢めく虱かな

と一句を捻つて細川氏師が頂戴に及んだ。

七　三春の行樂

旭山の櫻も散り病院の花も妙心寺の花も皆んな散つて青島の春はモー未練も名殘も無く、スツカリすんだ、三春の行樂此に盡き、ウスラ寒い風が時々雨さへ交へて、遊子の行を送る。

午后五時細川淵田等の人々に送られ、御サラバ青島よ幸あれ花の半月を面白く可笑く遊ばせて呉れた事を感謝する。

十三　泰山と曲阜

一　濟南公所長

山東鐵道部長阪口氏から惠まれて、道人生れて始めて汽車の一等寢臺車に眠り五月一日濟南着、金水旅館に宿を定め先濟南公所長遠藤氏を訪問した。氏は宗

教、教育、軍事、鐵道―政策、物資、集散等から見た―濟南を、諄々説き聞かされた、猶所員唐鎭業氏を通譯として。

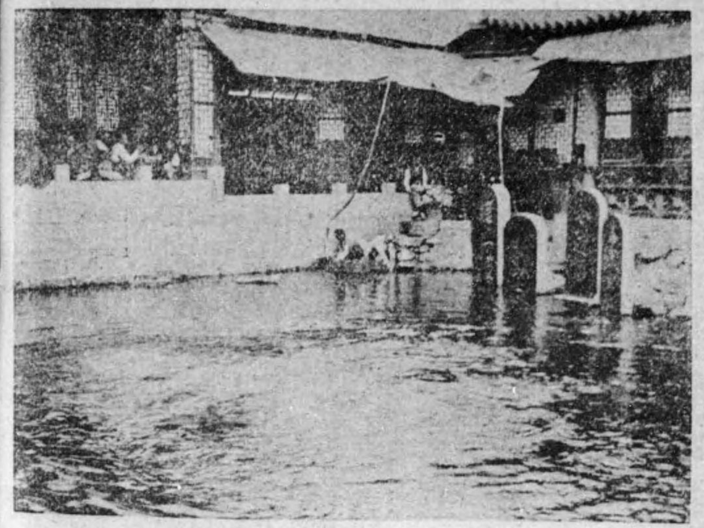
二　檢察官梅光氏（地方裁判所長）

に紹介された梅氏は驚く可き博識の人で、治法の傍ら佛書の研究に日も足らざる有様じやそふな。

起信、華嚴、維摩、等が尤も得意で日本版の大藏經續藏經を始め日本出版の佛書盡く渉獵せりと語る井上圓了、村上專精、前田惠雲、は凡夫の見で佛書を解する力は著書の何處にも見へぬと云ひ、筧博士の法理學は宗教者の目から何等の價値が無いと云ひ、宗演和尚の博學と雲照律師の道力には、感服したと云、釋慶淳師に師資の禮を取ると云ひ、今ま天台の教義を研究すると云ひ日本の高僧學者の名と、著作の題名と一經の要綱とを、能く諳じ其熱心な事は感心して仕舞つた。

濟南檢察長梅と道人

梅氏は八齋戒を堅く保つて、肉を口にせず妻帶せず、第一念に佛を唱へ、第二念に佛を見ると云ふ樣な事を云つて居る、寗波諦閑和尚は我師じやと云ふて居る、教相を喜ぶが禪宗は嫌だとも云ふ、但し日本の禪は抔と言譯もした。



閑談三時間辭して城内の見物をする。

三　趵突泉

は天下第一泉とも云ふ、池の中から徑十尺の圓を畫いて泉が突出する不可思議な清泉である、千佛山は其の昔舜の耕へした歴山で大明湖が太公望呂昌の直釣を垂れた所じやそうな、蘆葦の間を畫舫で一周し、圖書館を一見して歸つた。

四　武技十八般

滿鐵の理事改野氏と大淵氏が泰山上りをする遠藤氏の紹介で道伴にして貰ふ事と成る。

今日は一行と共に、支那の武技十八般を見るべく、山東鎮軍陸軍中將馬良氏の邸を訪ふた、將軍は回々教の信者で、又頗る親日派の人副官某は東京士官學校卒業味い日本語で通譯をする、將軍は副官を通じて武道の沿革を說明する。支那古有の武技は遠く淵源を黃帝に發し、唐朝以來は僧門の獨技と成り、小林寺劍法なる發明が出來、洗練され、圓熟され、各派の流派が生じた、將軍は其の各種各派の長處を集めて、又一派を發明したと云ふのである。

又一方在來の形を泯滅せざる事を計り、天下武技に長ぜる者の爲めに老を招き少さに傳へ大に勵む、毎日濟南人家の子弟を、其の庭園に引きて敎へる。

棒術、柔術、鎖り鎌、兩刀、青龍刀、鎗三種、種々の試合が皆眞劍を用ひて、

危險極まるものじや、見る者をして寒毛卓竪せしめる。

眞劍と赤手の鬪ひ、或は双劍を揮ひながら地上に轉々し、忽ち起き、忽ち倒れ騎兵の馬足を截り拂ふ抔の技を遣る、猿柔道、猿劍術、虎柔道、蛇劍術夫々妙技がある。

柔道も我が國の者と全く比較にならぬ、大地の上にウント擲げ倒し引き倒し、鎗で横腹をブスー抔、皆覺へず聲を上げ手に冷汗を握るコンナ恐ろしい試合を見た事は無い。

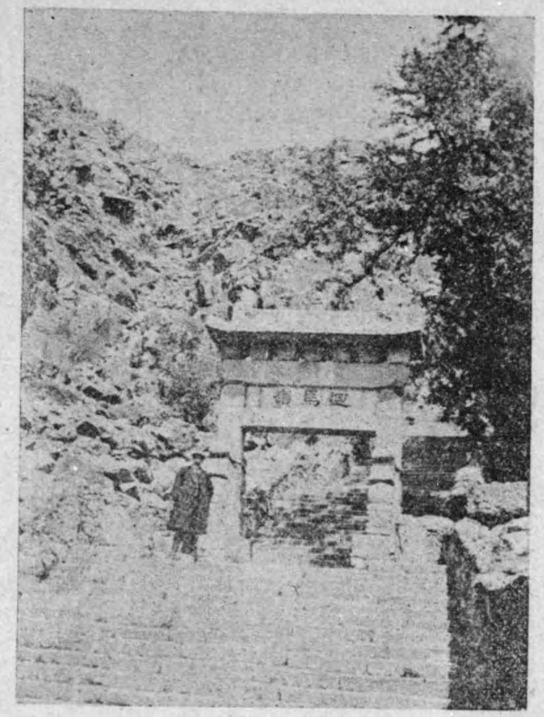
最後に笑はせたのは、力試の一段じや、黑煉瓦を十枚計り頭上に載せ、鐵槌で頭上をガントやる、瓦は微塵になる、顏は眞つ白になる本人は平氣で笑ふ次に背の上に重さ八十斤の扁平な割石を載せ、同じく鐵槌で打つ、石は五六片に碎けた、石割臺の人間は平氣で居る、煉瓦で横面をはり倒す瓦は碎けて本人は充ふ今度は一人仰臥して、手に百四十斤の石を差し上げ、足に百斤の石を持ち、其の上に又一人、足と手に持つ石を臺にして、仰臥する、同じく八十斤と百斤の石を手と足に載せる、猶其の上で五人の男が劍と槍で試合の形を見せて終いであつた。

イヤマー實に驚いた、百斤の石を隻手で差し上げる男は幾人も有るもの。

五　道伴と汽車

改野氏一行に新任の領事吉田茂君と、病院長の菅谷氏が加り、先導に唐君、コツク一人ボーイ二人で、中々の人數じや、一行の爲め天津から特發の汽車が、津浦線に聯結されて、一行を乘せ、午後八時濟南發、翌二時頃に一行の乘れる箱を、泰安驛に殘して浦口へ直行する、一行は客車の中に寢て、早朝山轎十箇に護兵十人巡警二人で堂々の陣を作つて泰山に上る。

六　泰山



泰山廻馬嶺

支那五嶽の一で、陝西の華山湖南の衡山河南の嵩山山西の恒山と、並び稱せられる絶頂迄が四十里、盤道屈曲凡そ五十餘盤、山高海拔五千四五百尺じやと云ふ、明の萬歷年間に、張五曲と云ふ男が竹竿で測つたら三百六十八丈有つたと云ふが竹竿で山高を測るは面白い只確實な事が分るまい。見るからに岩々たる山で確に名山たるの權威

泰山五大夫松

はある山轎は二本棒の中央に網籃をのせ人は之に腰を卸し前なる遊動木に足を掛けると、安樂椅子の形じや、擔夫が前後から之を舁ぎ、急阪絶壁も平地を行く如く頗る巧みな物であ

る。

七　漢　柏

高さ三丈餘周圍十八丁の磚壁を繞らした、大門の中に、漢武帝が植た柏、唐代に植た、槐がある。

建物も庭もある秦碑の殘片が二箇保存されて有名な物であるが、一行は其趣味に乏しい連中計りであつた。

泰山一の鳥井が岱宗坊で、此から暫くは、路傍に柏樹が多い、其から上は小松計りである玉皇閣に孫眞人と云ふ道士のミイラがある、此から少し行くと孔子登臨處と勒した、明の羅洪先の題字がある、此が一天門で、此から石段になる泰山の道路は全部石疊と石段で而も其巾が大抵十尺以上じや、轎を横に擔いて樂に登れる。

其から道路を跨いだ萬仙樓、右は桃花澗、左は清流風景中々面白い、斗母宮と云ふ尼寺で一休し、愈急阪に向ふ、石段は絶頂迄六千七百餘級ある、阪の岩面に（漸入佳境）と四大字がある。

右側の崖下の溪流に石徑峪がある、谷底の平たい岩面に一尺角の大字で、金剛經が刻んである、大部分は消磨して、九百字丈殘つて居る、筆者不明だが多分六朝のものだらーとの事じや。

高山流水亭、佳水流橋、水簾洞、登仙橋、と中々左顧右眄忙がしい事である、壺天閣を見て、椅山亭から下を見ると中々の好景じや。

八　廻馬嶺

廻馬嶺は石段がノベッに續いて、馬が登れぬから一名天關と稱する難所である此の登山道は古來二十幾朝二千有餘年を經て今尚保存修理せられ、歳修費六千兩に上ると云ふ事じや。

路傍の岩石の間に乞食が住んで居る窟が多い乞食は泰山の名物である。

廻馬嶺から登り詰た處が三大士殿で、二百級の石段は頗る急峻で左右が斷崖と來るから登山者は皆な膽を冷やす。

夫れから石段の數が六百餘級、黄峴嶺の馬の脊の如き處が中天門、まだ漸く半分路である茶店で一吹して來路迢々として通じるを見る中天門から眺望一變、愈〳〵泰山氣分になる、絶頂も見へる、南天門が遙かに仙宮の如く、月觀日觀の峯も望まれる、黑虎廟には虎の斑に似た奇石がある。

是れから少し下り阪になる、右方壁立した岩に、大少無數の刻字がある。

雲歩橋迄來ると支那的山水畫の絶勝で、巨劍の雲を研いて立つ如き岩や、歔峯仄辭畫手も及ばぬ岩石に老松稚松都合好く添ふて、布置の妙を得て居る。

橋を渡つて石段を上ると、五太夫松の額が有る、飛來石は其の左にある、五太夫松は無論秦の始皇が雨宿して、樹を封じたのであるが、樹は三本の松である、再び急阪を登つて朝陽洞に至る、溪を隔てゝ御風岩と云ふ壁立數十丈の岩の中腹に、乾隆帝御製の詩が、一字三尺角位に刻せられてある、素晴しい磨崖で、萬丈碑と云ふのであるそをな。

九　南天門

南天門の下迄來ると（山靜如太古）とある、此れから十八盤の始まり、登山の最難所、南天門の紅翌が雲表に聳へて、一千八百級の石段が直立して、實に雲梯の如く、嶮岩に垂下して、到底登れそをにない。

それでも轎夫は慣れたもので、徐々と登つて行く、乘客は三四尺高く、石段の外に宙ブラリをして居るから、轎夫が一ッ躓いたら眞つ倒さまに、萬仞の谷底に落ちて微塵と成る、魂が身に添はぬとは此の事じや。

上る時よりは下る時の方が一層心持ちが惡い改野氏は後向きに下りた、道人抔は半分徒歩した。

南天門に入ると聯がある。

門闕九霄仰
步三天勝蹟
階崇萬級俯
臨千嶂奇觀

南天門を脱けて三四丁行くと、碧霞元宮で泰山の本廟である、其の丹碧の一城廓は、實に仙客の圖畫を見る感がある。

泰山山頂始皇の立てた無字の碑

十　無字碑前の撮影

泰山の最絶頂に玉皇閣がある、泰山天柱の尖頭と稱する石の瑞垣をした處がある、此で洋食の辨當を開ひて、ビールを飲んで寫眞を撮つて絶頂を見物する（孔子小天下處）の碑がある始皇の無字の碑がある、巍々蕩々の碑、唐の玄宗の泰山銘、無數に有名な物がある、兎ても見盡せぬ、此等を一々見るなら三年も掛かると云ふ、或は泰山研究に八年も費して居ると云ふ人も有る、其れでも盡せぬらしい、實に大したものじや。

天下を小とするよりも天下を大とし度くなるし、泰山其の物が實に雄渾偉大で此の感想は道人共の筆舌には萬分の一も言ひ顯す事は出來ぬ。

午后八時には泰安の驛に飯て昨日殘し置かれた客車の中に寢る、夜中に天津から來た汽車は、又聯結して、曲阜に着くと、客車一輛を殘して置いて、浦口へ